

# F/GO 短編集

元ニーガタの英霊

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

2015年、カルデアの召喚機能はバグった。明らかにおかしいサーヴァントや、誰も知らないレベルなのに地味に強かったりする、そんなマイナー英霊とぐだ子を中心とするGOメンバーの熱き人類救済物語である！

※この短編はギャグです。

※タイトル、あらすじを変更しました

# 目次

カルデアが本気を出したようです	1	ジャパニーズF/GO	60
カルデアが本気を出したようです	ス	ジャパニーズF/GO	69
ステータス	8	源氏たちのF/GO	81
兄貴たちのF/GO	22	源氏たちのF/GO	90
兄貴たちのF/GO	22	源氏たちのF/GO	104
ステータス	8	源氏たちのF/GO	104
親父たちのF/GO	32	源氏たちのF/GO	104
親父たちのF/GO	32	源氏たちのF/GO	104
前編	32	源氏たちのF/GO	104
たかしと王様	42	源氏たちのF/GO	104
親父たちのF/GO	42	源氏たちのF/GO	104
後編	42	源氏たちのF/GO	104
父と王と	42	源氏たちのF/GO	104
親父たちのF/GO	51	源氏たちのF/GO	104
ステータス	51	源氏たちのF/GO	104



# カルデアが本気を出したようです

——永続狂気帝国セプテム——

連合首都において一人の男が追い詰められていた。彼の名はレフ・ライノール・フラウロス。彼は半狂乱になりつつも打開策を必死に模索していた。

「あり得ない、あり得ないあり得ないあり得ない……この私が、そんな低俗なサーヴァントに——！」

「もう終わりです、レフ・ライノール。貴方の負けです」

大盾を持った華奢な少女、マシユ・キリエライトは人類の大逆者にそう告げる。

その後ろには赤い髪をサイドテールにまとめた少女が、じつとその姿を見つめていた。

「認めん、認めないぞ。はは、はははははは。ならば壊そう！　すべてを破壊しよう！」  
レフはそう告げると、聖杯から新たにサーヴァントを召喚する。

「ふはははははは、これが最強の英雄、破壊の体現者、城門の破壊者と呼ばれた大英雄だ！！」

輝く聖杯、湧き上がるとてつもない魔力の波動にレフは酔いしれる。

そして召喚された破壊の英雄が姿を現す。

「——私は破か……。ちよつとまって、タイム」

「さあ行け！ 最強の英雄よ！」

「なに言ってるのお前？ ねえ、なにこれ。どうして私を呼んだの？ 馬鹿なの、死ぬの？」

召喚された英雄、フン族の大王、アルテラは召喚されたその瞬間、牙を折られた。そして、同時に教えてほしかった、これを私にどうにかしろと？ 頭に蛆でも湧いてるんじゃないかと、己が召喚者を問い詰める。

「ふん、ロムルス、アウグストウス、トラヤヌスのローマの英雄がやられようと、私には彼女がいるのだ」

「待って、なにそのローマ三大チートな面子、そんな奴らが勝てなかった戦場を私にどうにかできるとでも？」

ローマの健国王、神祖ロムルス。西欧の初代皇帝、神君アウグストウスことオクタウィアヌス。ローマの最大範囲を成し遂げた五賢帝の一角トラヤヌス帝、そんな奴が敗れた相手に私がどうにかできると本当に思ってるのかこいつは。

「同僚のバルやアスモダイがやられようと私には彼女がいる。チンギスⅡハンや始皇帝政とは格が違うのだよ！」

「うん、違うね。少なくとも私より格上だよその二人!」

あと、同僚って何? ヤハウエと戦った英雄神と元智天使の悪魔が同僚って何? こといつらそいつら倒せんの? . . . . . 倒せそうだね、明らかに格上だよ、奴さんたち。

「私は信じているのだ! きつと彼女なら貴様らを倒せるとなあ!」

「おい、召喚者、信頼が重いぞ。もつと機械的なムーブしようとしていたが、これは駄目だ。突っ込ませてもらう」

「突っ込む . . . . . / / /」

途端に顔を赤くするレフ、駄目だこいつ、はやくなんとかしないとアルテラが思っていたその瞬間、またもや状況が推移する。

「間にあつたか、大丈夫か、マスター」

「. . . . . ねえ、ちよつと。さらに悪化してるんですけど」

さらに二体ほどやばい英霊が増えたこの状況に対し、微塵も焦りを感じさせない召喚者に対しアルテラはあきらめの極地だ。もう駄目だあ、おしまいだあ、降伏したい。

「. . . . . まさか、黄帝と蚩尤の二人を打ち破るとは . . . . . だが、私にはまだ彼女がいる」

「. . . . . すいません、私匈奴系の移民がルーツなんですけど、何その幻のタッグ、

「凄く見てみたかった」

異民族の王にして漢民族の怪物蚩尤に中国の道祖神である黄帝のチートタッグに勝利？ 嘘だと言ってよ、ブレダ兄さん……。え、せやけどそれはただの現実や？ 夢やあらへんの？

脳内のブレダは真顔で手を横に振る様子がアルテラには見えた。

「……………じ、自己紹介をしよう、私はアルテラ。セイバーだ」

「なにをしているアルテラ！ 速く奴らを殺せ！」

お願い、黙って。君はあれか？ よく映画とかにいる面白黒人枠でも狙っているのかい？ せめて空気を読んでほしかった。

「……………ぐだ子」

「マシユ・キリエライトです」

うん、ゴメン。君らはどうでもいいんだ。用があるのはその五体のサーヴァントだから。

「我が名はムハンマド・ムンタザル、セイバーだ」

「俺はサオシユヤント、クルサースパ。ランサーのサーヴァントだ」

「僕はカルキ！ 見ての通り、ライダーだよ！」

「オルガマリー・アニムスフィア、サーヴァントとしてはアラヤよ、クラスはアサシンね」



「拙僧は弥勒菩薩だ、キャスターだが、魔術師ではないな」

「「ただの通りすがりの救世主だ（よ）」」

「ただの救世主が五人といてたまるか！ おい召喚者！ お前何をした!!」

「ぐっ、離せ。何をする！ 私はただ人類を滅ぼそうと……!」

「だからか！ だからなんだな！ だから救世主が敵なのか、ふざけるな、ふざけるな！

バカヤロー!!」

アルテラはさ、どんな大人になりたいの？

いきなり出てこないで、ブレダ兄さん。夢は叶えたからさ、ちゃんと兄さんの跡を継いで大王になったから。

どんな大人かと言ったら、この場を切り抜けられる大人になりたかったよ、切実にね

！ 畜生！

「こうなったら自棄だ！ やってやるよ、『フォトン・レイ軍神の剣』!」

それはまさしく天罰の象徴、神の鞭と呼ばれた彼女の持つ軍神マルスの剣。三色の刀身から出る極光により、その一撃は地上おける「あらゆる存在」を破壊し得る。そして、その一撃はまさしく、対城クラスの一撃である。

だが、上には上がいる。

『再臨する礼賛の聖剣』  
ズルファイカール・アル・マフデイ

まるでギャグのように、極光の一撃は真つ二つに引き裂かれる。そう、文字通り真つ二つだ、聖剣の中では最高峰に位置するイスラム圏私至上の聖剣は伊達ではない。

聖剣自体に切断の概念があるのだろう、そして効果範囲は対城クラス。

「知ってた」

それそうなるよ、だって奴さん天使より下された唯一神の聖剣持つてるんだもん。汚い、流石世界三大宗教、汚い。

命とは投げ捨てるもの？ ごめん兄さん、救世主が相手なんだ。私はケンシロウじゃなくてジャギだったみたい。

「くつ、相手はあのフン族の大王か、油断するなよ！」

「少しは慢心してくれませんかねえ……………」

「宝具を解放する、みんな離れて……………」

あ、これ死んだ。何せ宝具を解放するのはあのライダー。しかもいつの間にか馬頭の鎧を着こみ、ぼつちりとこちらを見据えている。

「召喚者……………」

「なんだね」

心底不思議そうな顔で、こちらを見る緑色の紳士、やはり緑は畜生ですぞ？ そうだね兄さん、初めて気が合ったよ。

「お前盾な」

「え？」

『星辰よ、我らは煌めく流れ星』

それは、末法の世を切り裂く夜明けの一撃、旧世界を滅ぼし、新世界へと至る救世の一撃。その最大範囲は世界そのものを包み込む。対界の一撃。

(……ああ、あつたかいなあ)

あ、ブレダ兄さんが手を振ってる。そんな優しい幻に包まれながら、アルテラは塵と  
なつて消えていった。

# カルデアが本気を出したようです ステータス

【CLASS】セイバー

【マスター】ぐだ子

【真名】ムハンマド・ムンタザル

【性別】男性

【身長・体重】158cm・47kg

【属性】秩序・善

【ステータス】筋力B 耐久B 敏捷B 魔力A+ 幸運A 宝具EX

【クラス別スキル】

対魔力：A+

A+以下の魔術は全てキャンセル。

事実上、魔術ではセイバーに傷をつけられない。

## 【固有スキル】

救世主：E X

一つの宗教観において「救世主」と呼ばれたことを示す。

世界を救う存在。属性が悪の英霊に対し、常に全ステータスに十補正がかかる。人類が滅びゆく現状、救世主であるセイバーの信仰は最大となっている。

無冠の武芸：—

驚き戸惑う衆愚から浴びせられる不信と嘲笑。

初見の相手からは全パラメータとスキルのランクが実際のものより一段階低く見える。真名が明らかになると、この効果は消滅。

啓示：A

目標の達成に関する事象全てに最適な展開を“感じ取る”能力。預言者ではない只人にして、この精度は破格といえる。

洗礼詠唱（回教）：A+

イスラム教における“神の教え”を基盤とする魔術。

その特性上、霊的・魔的なモノに対しては絶大な威力を持つ。

【宝具】

『再臨する礼賛の聖剣（ズルフィカール・アル＝マフデイ）』

ランク：A++ 種別：対城宝具 レンジ：1～99 最大捕捉：1000人

回教至上の剣。救世主が振るう力の大源。破魔の武器。

大天使から預言者、大英雄、歴代のイマームを経てセイバーの元へ至った宝具。

「切斷」の概念を持つ。

【解説】

12イマームが最後の直系の血筋。ムハンマド・ムンタザル。母親はビザンツ帝国の息女であり、その美貌をもって生まれてきた。

現在は裏カイバにて隠遁中であるが、世界の危機に際し登場、偽預言者などを打倒し、世界を救う救世主。

【CLASS】ランサー

【マスター】

【真名】クルサースパ

【性別】男性

【身長・体重】200cm・88kg

【属性】中立・善

【ステータス】筋力A 耐久A 敏捷A 魔力A 幸運A 宝具EX

【クラス別スキル】

対魔力：EX

千の魔術を操る悪龍に対する防御。

事実上、魔術・魔法ではランサーに傷をつけられない。

【固有スキル】

救世主：EX

一つの宗教観において「救世主」と呼ばれたことを示す。

世界を救う存在。属性が悪の英霊に対し、常に全ステータスに+補正がかかる。

人類が滅びゆく現状、救世主であるランサーの信仰は最大となっている。

祈願：A

神や精霊、あるいは動植物などへの嘆願という原始宗教系の魔術体系。

祈祷者の願いに霊的存在が答えることで、様々な奇跡を行使する。

勇猛：A+

威圧・混乱・幻惑といった精神干渉を無効化する能力。

また、格闘ダメージを向上させる効果もある。

魔力放出（光）：A+

武器、ないし自身の肉体に魔力を帯びさせ、瞬間的に放出する事によって能力を向上させる。

ランサーのそれは光り輝くオーラとなつて使用者の意志に則り自由に操作が可能。

【宝具】

『悪打ち倒す、救世の英雄（アフラ・マズダ）』

ランク：EX 種別：対人宝具 レンジ：— 最大捕捉：1人

あらゆる悪を倒し、世界を救う怪物退治の英雄クルサースパのその肉体。

あらゆる魔術を防ぎ、あらゆる痛みを厭わず、多くを救うために生を費やしたその生



き方。

悪と戦うクルサーズパはいかなる攻撃、いかなる魔術を無効化し、優先的に自身に幸運を招く。

【解説】

中東のヘラクレスとでも言われる大英雄にして、世界の滅びに際して復活し、ダハカ竜を打ち倒す大英雄。来たるべき日に復活するというが、これはいわゆる転生なのではないかとニーガタは思っている。神代の人物なのに真人間かつ未来人という訳の分からない存在、ノツブの宝具が産廃と化す原因の人。

つまりハーメルンや小説家になるうは神話の二番煎じなのだよ!!↑な、なんだってー!?

これは新しいネタになりそうだ、なんて思っている。

【CLASS】ライダー

【マスター】

【真名】カルキ

【性別】男性

【身長・体重】 188cm・71kg

【属性】 秩序・善

【ステータス】 筋力A 耐久A 敏捷A 魔力A 幸運A 宝具EX

【クラス別スキル】

対魔力：A+

A+以下の魔術は全てキャンセル。

事実上、魔術ではライダーに傷をつけれられない。

騎乗：A+

騎乗の才能。獣であるのならば幻獣・神獣のものまで乗りこなせる。

ただし、竜種は該当しない。

【固有スキル】

救世主：EX

一つの宗教観において「救世主」と呼ばれたことを示す。

世界を救う存在。属性が悪の英霊に対し、常に全ステータスに+補正がかかる。

人類が滅びゆく現状、救世主であるライダーの信仰は最大となっている。

魔力放出（光）：A+

武器、ないし自身の肉体に魔力を帯びさせ、瞬間的に放出する事によって能力を向上させる。

ライダーはこれを一定の方向に射出することを得意としている。

神性：A+

維持神ヴィシユヌ最後の化身（アヴァターラ）。

最高神クリシユナや純人間ラーマなどの特殊な化身体とは違い、あくまでカルキは英雄であるため

その神霊適正は“最大”に留まる

無我：B（A+）

本来なら自我・精神を持たないため、あらゆる精神干渉を無条件で無効化するが、英雄として召喚されたため人間らしい情緒をもつ。

【宝具】

『星辰よ、我らは煌めく流れ星（クリタ・ユガ）』

ランク：EX 種別：対界宝具 レンジ：1〜99 最大捕捉：1000人

末世を統べる「カリ・ユガ」を滅する創世の光。

『駿馬よ、新星を駆けよ（デーヴァダッタ）』

カルキが所持する白馬であり、時にはカルキを守る馬頭の鎧へと変化する。

### 【解説】

ライダーさん、実は聖杯大戦形式なら出場していた可能性がある人でもある。

インドの救世主でヴィシヌの化身、その後。すなわちExtraの覚者と同素体でもあるというチートっぷり。destinationにて活躍中、GOで内定の決まったラーマさんとも同素体であるといえればわかってもらえるだろう。ハーメルンでいえば神様転生者である。

インドでも上位クラスの英霊である未来の王様らしい。ハーメルンの聖杯戦争では出てこない人、みんなもつと救世主だそうぜ！ こんなんじゃ原作のインフレについていけねえぜ！！

### 【CLASS】アサシン

【マスター】

【真名】 人類の守護者、アラヤ（オルガマリー・アニメスファイア）

【性別】 女性

【身長・体重】 オルガマリーかわいいオルガマリーかわいいオルガマリーかわいい

【属性】 秩序・善

【ステータス】 筋力E↘A 耐久E↘A 敏捷E↘A 魔力E↘A 幸運E↘A 宝具E X

【クラス別スキル】

気配遮断：E X

サーヴァントとしての気配を絶つ。完全に気配を絶てば発見することは不可能に近い。

抑止の守護者として人知れず人類種を救うための掃除屋としての役割。もはやそれは概念に近い。

【固有スキル】

抑止の守護者：E X



ガマリーかわいいオルガマリーかわいい・・・

【CLASS】 キャスター

【マスター】

【真名】 弥勒菩薩

【性別】 男性

【身長・体重】 165cm・50kg

【属性】 秩序・善

【ステータス】 筋力C 耐久C 敏捷C 魔力EX 幸運EX 宝具EX

【クラス別スキル】

陣地作成：D

魔術師として、自らに有利な陣地を作り上げる。

“結界”の形成が可能。

道具作成：E

魔術的な道具を作成する技能。

【固有スキル】

救世主：E X

一つの宗教観において「救世主」と呼ばれたことを示す。

世界を救う存在。属性が悪の英霊に対し、常に全ステータスに+補正がかかる。人類が滅びゆく現状、救世主であるキャスターの信仰は最大となっている。

菩提樹の悟り：E X

世の理、人の解答に至った者だけが纏う守り。

対粛清防御とも呼ばれる”世界を守る”証。

無条件で物理攻撃、概念攻撃、次元攻撃のダメージを自身のHP数値分、削減する。

また、精神干渉ならば100%シャットアウトする。

EXランクに至ったキャスターなら人の七欲さえ風の様に受け止めるだろう。

法術：E X

神仏の教えに、己の力を上乗せして成立させる仏教系の魔術。



その特性上、靈的・魔的なモノに対しては絶大な威力を持つ。

【解説】

仏教における救世主、救世主であるときは人間なので神性はつかない。ただのお坊さん、もといOBOUSANである。

宝具はたぶん浄化宝具、悪人や霊体に対して特攻、サーヴァントなんてカモもいところ、デミサーヴァントならワンチャン。

キャスターの癖にメイン盾を救世主鯖の中ではメイン盾を張れるレベルの人、鯖はやっぱリステータスよりスキルだよってことを教えてくれる人。

## 兄貴たちのF／GO

「……………これは一体どういうことですか？」

カルデアの一室において彼らは集められた、一人はブリテンの王にして、騎士王と崇められたアルトリア。

「……………マスターから話があると聞きましたが」

「……………私も」

もう一人はへそを大きく出した痴女さながらの服装を纏うライダー牛若丸と、純白の衣を身にまとった戦闘王アルテラの三人が集っていた。

「まあ、おそらく私たち三人に共通する事柄なのですが、心当たりはありますか」

「うーん、私はお二方のようにセイバーでも、ましてや王でもありませんからね。三人とも女性である。くらいでしょうか」

「でしたら、他の方だっているでしょう、マシユさんや、ライダー……………メデューサとかもいるでしょうし」

頭を抱えて悩むアルトリアと牛若丸だが、そんな状況に際し、アルテラは一言漏らす

「TSS?」

「あ」

「そうか、この三人、史実では男として語られていた身、そうなると領けるが……」

「……いや、その場合だったらネロ皇帝がいないのはおかしいですよ」

牛若、渾身のファインプレーをするが  
「いや、ネロはローマですから」

「ローマ……ローマ……ローマ……」

「駄目だこいつら、ローマ面に汚染されてやがる」

アルテラさん、貴方最初はローマ蹂躪してたでしょう、東ローマとか、貴方にとってカモだったじゃないですか。一発ぶん殴った方がいいのではと思つたときに、扉が盛大に開かれた。

「おはよう諸君！ 今日もいい救済日和だ！」

「救世主……レフ……うっ、頭が！」

なぜかアルテラのトラウマが再発しているかは兎も角、今日も今日とてマスターはテンションが高かつた。

「いやはや、聞いてくれ、今日は何とー／＼サイズのオルガマリー抱き枕が手に入つてね、これが中々萌える。流石Dr.浪漫だ。おっとと、今はそんな話をしている場合じゃなかつた、君たちにも朗報があつてねマシユ、連れてきなさい」

「はい、先輩」

部屋の中に足を踏み入れた、マシユは神妙な面持ちで、部屋に入ってくる。マスターであるぐだ子は楽しそうに笑っているが、なんだろう、寒気しかなかった。

「兄三銃士を連れて来たよ」

「兄三銃士？」

疑問を漏らす三騎に対し、マスターは笑みを浮かべつつ答えた。そして、その言葉に意味に気づいてしまった。

「フン族の共同王、和議で貰うお金が大好き。クラスはライダー、ブレダ兄さん」

「うっす、よろしく」

「タイム……」

短髪に口髭を蓄えた大柄な男、彼こそアルテラの兄であるフン族の王、ブレダである。アルテラの脳内に出てくることだけじゃ飽き足らず、こうまでしてでも出たかったのか。ちなみに出場権は庄司との裁判の結果手に入れたと言っていた。

ブレダ、無言のサムズアップ。アルテラはそつと目を逸らした。

「……これはもしかや」

なぜだろう、冷や汗が止まらない。アルトリアはまさかまさかとは思いつつも、アルテラとブレダの様子を見るしかなかった。

「ツンデレ毒舌お兄ちゃん。クラスはキャスター、サー・ケイ卿」

「アルトリア、悪いことは言わん。その剣を寄越せ」

「義兄上エ……」

アルトリア、目頭を抑える。できるなら、もう二度と会いたくはなかった。それほどまでに苦勞と負責を背負わせてしまった義兄なのだから。

大丈夫だ、アルトリア、たかが致命傷だ。冷たい視線が、アルトリアに深く突き刺さっていた。

そして、その状況に際し、一段と目を輝かせている少女がいた。そう、牛若丸である。この状況、おそらく兄だ。そう、彼女の敬愛する兄が来るのだ。そう思うと自然と胸が高鳴る。

「知勇兼備にして、大軍を統率した武士。あとは分かるな牛若丸」

「はい！ 兄上ですな！」

「そうだ、入ってきてくれ」

そう、彼こそが大英雄。武家の棟梁として君臨し、鎌倉幕府というシステムを創り上げたもう一人の天才。

「やあ、九郎。久しぶりだね」

官服に身を包み、身だしなみを整えた、好青年。雰囲気でわかる温厚そうな顔立ち。

源頼朝——

——の弟である範頼くんだった。

「違う、お前じゃない」

「え？」

君、牛若丸の兄だよね？

ええ、一応轡を並べて戦った仲です。

ぐだ子と範頼の混乱はさらに深まるばかりであった。おかしいな、せつかくの家族との対面、涙を流しながら抱擁するとばかり思っていたのに。ぐだ子は訝しんだ。

「牛若丸、あんなにも兄上兄上と言ってたじゃないか、範頼の何が不満なんだい」

「もしかして、わしが無能なのがいけないのかい？」

兄頼朝以下の政治能力と弟以下の戦術能力を持つ範頼ならむべなるかな、あんなにも兄上のが好きだという牛若の為に石を割り続けた結果がこれとは許されざるよ、論吉を返して。

「いや、違うのです。兄上なんですけど、兄上じゃないんです」

「……確かに母親は違うが」

「複雑なご家庭なのですね」

「ええ、だからこそ、家族の絆は大切にしたいのですよ。平氏討伐まで生き残ったのは、兄と全成と九郎だけでしたから……」

平氏討伐が終わった後、源氏兄妹12人の内範頼が知る中で生き残ったのはわずか5名。勇猛な義平兄様、お優しくかった朝長兄様等を筆頭に、従兄弟の義仲も指針の違いにより討ち取った。

本当に、本当に苦しい戦いであつたと、範頼は今でも思うのだ。

「範頼さん、可哀想です」

「牛若！ 謝りなさい！」

「今なら範頼さんも許してくれますよ！」

謝れ！ 範頼さんに謝れよ！

「えっ!? なにコレ! 私が悪いの!?!」

みんなどうしたんだよ!?! 混乱する牛若。

牛若は人の心がわからない。同情の視線が範頼の集中する。

「そもそも、源氏が平氏に勝てたのは、範頼さんのおかげじゃないか!」

「そうだぞ、範頼さんが大手軍を率いたからこそその戦果じゃないか!」

「そうです、牛若丸さんが奇襲なんていうワンマンプレイが出来たのも、範頼さんが居たからじゃないですか……!」

「なん……だ……と……!?!」

なんだこの状況、みんな何いつてんだらう。頭が可笑しくなりそう。

助けて、頼朝兄さん。え、無理? 事実だからしょうがない?

「わ、私が義仲を討伐できたのは……!」

「範頼が、戦上手の今井兼平を引きつけていたからだろう、京都から逃げられないように逃げ口を塞いだのも特筆に値する」

「貴方の功もあるでしょうが、それ以前にさつさと京都に入って範頼はいませんなんて讒言したので差し引きゼロですね。しかも貴方はそれ以来朝廷に頭が上がりなくなっている」

「ぐぬぬ……」



ブレダとケイによる追撃でぐうの音も出ない牛若丸。何せ事実だからだ。

「一の谷！ 一の谷の戦いはどうです!？」

「正直、君いなくても勝てたんじゃない。いや、戦を早々に終わらせたのはすごいと思うよ」

「ですが、それも範頼が敵主力を生田の森で足止めしていたからです。まあ、それなりに功はありますが」

「なぜ真つ向から認めてくれない」

「ぶっちやけ範頼とお前なら範頼の方を買ってるから」

「ぐふう……」

円卓にもいましたよ、牛若みたいな厄介な奴。範頼ポジ？ いなかったね、皆なにか拗らせてた。まともそうだったのはアグラヴェインぐらいでしたよ。

範頼と牛若なら範頼の方が安定するよね。理解できる良将と理解できない天才なら、そら良将を取るよ。

ケイ兄さんからはとんでもない苦労人臭が、ブレダ兄さんは予想以上に安定志向だった。

「まあ、それでも家族だ。アルテラも昔は可愛いところもあつてだな」

「やめて、やめて！ ホントやめて!!」

「アルトリア、後で説教ですからね。反省文百枚。終わるまで御飯抜きです」  
 「なっ!!」

途端に二人が話題を逸らした。

なんだろう。まぶしい、あの二人がすごくまぶしく感じる。

「いいえ、わしが悪いのです。そうか、異母兄弟の私より、同母兄の全成が良かったのか」

違います、範頼兄様は勘違いしています。あとやめて、私の立場が無くなっちゃおう。

「ぐだ子殿」

「ああ、わかっている。みなまで言うな。必ず全成を召喚してやろう、だからお前が犠牲になる必要なんてないんだ、アサシン」

「これが、BUSHIDOU・・・」

「なんてカッコいいんだ、これがSAMURAI・・・」

きつと、ドラゴンにだつて勝てるんだ。だつてアサシンだもん。

「そうと決まれば石を拾いに行こう、ヒヤッハー！ オルレアン周回だぜ！」

「わしもお伴しましょう」

「くつ、キャスターであるこの身が嘆かわしい、仕方ない。妹の再教育があるので私はお暇しましょう」

「え？」

「俺はいくぜ、久々に妹と一緒に戦いたいしな」

「はあ、兄上も困った方ですね。貴方は直接戦闘より交渉の方が得意でしょう?」

「なーに、俺もフンヌの戦士だ。俺の弓馬の腕を甘く見ちやいかんよ。あ、そうだ。ついでにローマを攻めよう! 小遣い稼ぎになる」

「いかんでしょ、まあ小次郎とハサン先生も誘ってドラゴン狩りですね、準備してきます」

「ヒヤッハー! Dr. 浪漫の胃はズタズタだあ!!」

こうしてオルレアンはSAMURAIとハサンとBANZOKUによって平和になったとき、めでたしめでたし。

「いや、なんもめでたくないから!!」

一人残された部屋の一室で、牛若丸は一人叫ぶのであった。

# 兄貴たちのF／GO ステータス

【CLASS】ライダー

【マスター】ぐだ子

【真名】ブレダ

【性別】男性

【身長・体重】184cm・74kg

【属性】中立・善

【ステータス】筋力C 耐久C 敏捷B 魔力C 幸運B 宝具A+

【クラス別スキル】

対魔力：C

第二節以下の詠唱による魔術を無効化する。

大魔術、儀礼呪法など大掛かりな魔術は防げない。

騎乗：A

幻獣・神獣ランクを除く全ての獣、乗り物を自在に操れる。

【固有スキル】

早駆けの乗法：A

騎馬民族に伝わる、特殊な乗馬技術。

騎乗物の敏捷性、持久性を向上させ、さらに本人の騎乗時中の魔力消費を抑える効果がある。

カリスマ：C

軍団を指揮する天性の才能。団体戦闘において、自軍の能力を向上させる。

カリスマは稀有な才能で、小国の王としてはCランクで十分と言える。

千里眼：C

視力の良さ。遠方の標的の捕捉、動体視力の向上。

【宝具】

『蹂躞踏破・弓騎蛮王（テュルク・フンヌ）』

ランク：A+ 種別：対軍宝具 レンジ：1〜99 最大捕捉：10000人

フン族が誇る万馬の軍勢、恐るべき騎馬民族による蹂躪。

共同王ブレダとその兵士が得意とする騎射による流れるような一斉射撃をもって敵を蹴散らし、そのすべてを蹂躪する。

かつてのヨーロッパにおける蛮族による略奪、その恐怖の再現。

### 【解説】

ブレダ「おまえ、なんで『蹂躪踏破・弓騎蛮王』使わないの？ この宝具ニーガタが来るべき日にお前にやろうとした宝具だよ。なんか俺のモノになっただけだ」

アルテラ「サーセン」↑ニーガタ版は対城の剣、対軍の軍勢宝具を持つ性格ブレダ兄さんでした。

【CLASS】アサシン

【マスター】ぐだ子

【真名】源範頼

【性別】男性

【身長・体重】165cm・56kg

【属性】秩序・中庸

【ステータス】筋力C 耐久C 敏捷C 魔力C 幸運B 宝具E

【クラス別スキル】

気配遮断：D

サーヴァントとしての気配を断つ。隠密行動に適している。

ただし、自らが攻撃態勢に移ると気配遮断は解ける。

源氏兄妹の中でも格段の影の薄さ。

明らかに範頼の方が戦功をあげているのに朝廷は義経に尻尾を振っている、無能。

【固有スキル】

情報抹消（偽）：A+

対戦が終了した瞬間、一つでもアサシンのステータスより上回っている相手がいる場合、

或いは相手がそう認知している場合、

目撃者と対戦相手の記憶から彼の能力・真名・外見特徴などの情報が消失する。

葦屋浦の戦いって知ってる？ え、知らない。・・・そう。

無冠の武芸：―

様々な理由から他者に認められなかった武具の技量。

相手からは剣、槍、弓、騎乗、神性のランクが実際のものより一段階低く見える。

真名が明らかになると、この効果は消滅。

頼朝も義経もすげえんだぜ！ 範頼？ 誰それ？

軍略：C

一対一の戦闘ではなく、多人数を動員した戦場における戦術的直感力。

自らの対軍宝具の行使や、逆に相手の対軍宝具に対処する場合に有利な補正が与えられる。

めんどくさい諸将を束ねる胃痛役。 兄上、こいつら問題児ばかりだよ。

【宝具】

『蒲冠者』

ランク：E 種別：対人宝具 レンジ：― 最大捕捉：―

源氏一門、源範頼の異名。優れた武士でありながら、ただひたすら兄や妹たちの影に



隠れ続けていたその生涯。

アサシンのステータスを隠蔽、更に真名が割られていてもさらにおのれのステータスをワンランク低く見える。

温厚かつ家族思いな彼、されどその最期は彼も兄による暗殺であった。頼朝は一体、この男に何を見たのだろうか。

### 『参州代將軍』

ランク：A+ 種別：対軍宝具 レンジ：1〜99 最大捕捉：100000人

平氏追討、その総大将として兄より直々に命じられ、見事平氏を打ち滅ぼした範頼最大の偉業。

幕府から派遣された将たちを統括し、命ずるがままに相手を打ち滅ぼすまで止まらない武家の棟梁のその代行としての権限。生涯不敗たる軍の統括は彼が最も得意としたものである。

### 【解説】

頼朝「範頼は絶対に滅ぼす、だって俺、あいつに勝てない可能性もある。最悪、御家人の中で俺じゃなくアイツに付く奴もいる可能性がある。義経はワンマンプレイで諸

将には嫌われていた、けど、範頼はそんな諸将に好かれている。

なんでもいい、こじつけでもいいから殺そう、あいつは俺の兄弟の中で一番優秀だから」

牛若「兄上、私は？」

頼朝「お前は政治馬鹿だから殺した。まあ、お前のお陰で朝廷から讓歩を引き出せたり、目の上のたんこぶだった奥州藤原氏を滅ぼせたから、感謝するよ、それだけはな。あと、お前と範頼だったら範頼の方がすごい」

【CLASS】 キャスター

【マスター】 ぐだ子

【真名】 サー・ケイ

【性別】 男性

【身長・体重】 172cm・68kg

【属性】 秩序・善

【ステータス】 筋力C 耐久C 敏捷B 魔力A 幸運B 宝具B

【クラス別スキル】

陣地作成：E

魔術師として、自らに有利な陣地を作り上げる。

若いころは冒険にもいきましたが、歳を取ったら快適な空間で、私はいつも書類整理をしていました。

道具作成：—

魔術的な道具を作成する技術だが、キャスターは道具の手入れ、維持を得意とする程度である。

特に剣磨きは見事の一言に尽きる。

【固有スキル】

魔術：A

主に身体の変化や強化の魔術を得意とするほか、オーソドックスな魔術にも精通する。

話術：B

言論にて人を動かせる才。

国政から詐略・口論まで幅広く有利な補正が与えられる。  
毒舌に優れ、相手を怒らせ冷静な思考を阻害する手段に長ける。

王佐の才：C

王器を持つ者を補佐する才能。

己に相応しい王者に仕えることで、互いの欠落を補完するスキル。

カリスマの影響下にある場合のみ、あらゆる判定に有利な補正が与えられる。

王をちゃんと矯正しようとした奴はこいつしかいない。円卓？ 自分勝手だよね。

#### 【宝具】

『癒えること無き巨人の短剣（ウルナツハ）』

ランク：C 種別：対人宝具 レンジ：1〜4 最大捕捉：1人

能力、ゲイ・ボウ。

#### 【解説】

またのクラスをバトラー、執事である。若きときは武勲に富み、巨人ウルナツハを倒すなど活躍した。

アルトリアが王になると、その補佐として彼女を支えることとなる。生真面目でツンデレで毒舌な兄さん。

円卓が脳筋過ぎて、文官が彼ぐらいしかいないという大きな問題も抱えつつ何とか頑張ってたんだけど、円卓が円卓すぎて、崩壊。アグラヴェインが真面目すぎた結果である。

カムランの戦いの折りに戦死、既に腰の曲がった老人であった。

魔術をつかえばそれなりに若さも維持できただろうが（肉体を変化させるのでそういった方面に向いていた）、ケイはそれをしなかった。なぜなら、老いることのない彼女の前だからこそ、彼は身を以て年月がどれ程過ぎたかということを証明し続けたためである。

長くして戦線を引き、年老いた体では、とてもじゃないが戦争には生きられなかった。それでも彼はなぜ戦ったのか、それはただ彼の胸のみにしか答えはない。

# 親父たちのF／GO 前編 たかしと王様

「聖杯コロッセオですか？」

「せやせや」

カルデア内部にあるぐだ子の私室にて、マシユは疑問を浮かべた。

「実はローマに新しい聖杯が出現してね、その権利を巡ってコロッセオにて天下一武闘会が繰り広げられるらしい」

「いろいろと突っ込みどころ満載ですけど、まあネロさんのやることなので何も問題は  
ありませんねローマ」

「ローマローマ」

突っ込みどころとか言っているのに突っ込み不在とは何とやら。それは兎も角、早々に聖杯コロッセオに出場することを決めたくだ子は出場メンバーの選定をするのだった。

「イカれたメンバーを紹介するぜ！ デミサーヴァントのマシユ」

「安定の盾ですね、わかります」

安定の相棒枠としてマシユ、なんだかんだ言っても盾役として重宝し、スキルも有用

なものが多い。加えてマスターであるぐだ子とも相性が良かった。

「以上だ！」

無理無理無理、腕を横に振るマシユは、無表情で否定の意を表した。

「なに冗談だ。メンバーはほかにも用意している。まずはすまないさん！」

「すまない、情けない竜殺しですまない……」

アルトリアもアルテラも兄との交流で水を注すわけにはいかないのでピンチヒッターとして登場したすまないさん、数合わせ的な感覚が強い。だらしなないセイバーですまない。

「AU王」

「我はソフトバンク派だ」

「私はドコモです」

「なん……だと……!?!」

完全な不一致。どうやらAUはぐだ子だけだったらしい。

「ちなみにDr. 浪漫は林檎です、F/GOの初期は盛大に爆死しました」

「Oh……」

可哀想に、だが私は謝らない。By 庄司。完全にかみ合わないチームカルデア。ちなみにオルガマリーは黒電話しか使いこなせないらしい、あざとい。

「最後、鳥海」

「え？」

驚くように反芻したのはアステリオス。反英雄である怪物である

「人肉と女と聞いてやってきました！」

けたたましい扉の音を鳴らしながらやってきたゴールデン。

「あつたよ！ 串焼肉が！」

「でかした！」

こんがりと焼かれたイエニチエリを持ってきた領王も備わって最強に見える。

「この串焼肉はできそこないだ、食べられないよ。明日来てください、もつとうまい串焼  
き人肉を見せてやりますよ」

そしてその背後から現れた白衣の男。

「ハンニバル先生はdestructionに帰ってください」

「待つてください！ 人肉と言えば私の国が」

「荊軻、それ以上いけない」

「くそ！ こんなところにいられるか、私はローマに戻るぞ！」

なんだこれはカニバリズムに侵食されてきている、このままでは変態短編になってしま  
うと感じたぐだ子は追いかけてくる数人の気配を感じながらカルデアスの下へと急



ぐのだった。

「ちよ、ぐだ子ちゃん何してるの?! え、なにこいつら!? カオス」

最後にD r. 浪漫の声が聞こえた気がしたが、気にせずぐだ子は駆け抜けたのだ。た。

「お、おう。なんだかカオスな連中であるな」

「えっ、ネロ・カオス?」

違う、そうじゃない。ネロは腕を振って否認するが、ぐだ子がぐだつてるためにいまいち意味はないのだろう。私は丹下ボイスです、決して中田譲治ではありません。

「譲治と言えば余だな、そうと思わないかイエニチェリのたかし君。『そうだね、アーカードおじさん』」

狂気の空間、黒焦げたイエニチェリ兵と腹話術を繰り広げる領王、こいつ狂ってやがる。えっ、バーサーカーだから何も問題はない?

せ、せやな。

ちなみにたかしくんの声は中田譲治だった。

「人肉なら食べましたよ、こゝことは比べ物にならない大江山で美姫の肉をね。お

ええ………」

その傍らでは金時がトラウマ発症していた、駄目だこのバーサーカー早く何とかしないと。

「とりあえず、マシユ、鳥海、英雄王で行こう。バーサーク・ランサーとゴールデンは後衛で」

「マシユはいない。どうやらはぐれたようだ。すまない………」

「ちなみに私もいるが？」

「じゃあ、すまないさん前衛ね。ハンニバル先生は帰って。いこう、この戦い。我々の勝利だ」

どうしてぐだ子はそうそうにフラグをたててしまうのか、そうしてコロツセオに入つた矢先のことだった。

「——『雷鳴轟く主神の偽槍』」

「ぐわああああ!!?!? 『ぐわああああ!!?!?』」

「ぐふっ!!?」

突如として鳴り響く轟音、光る雷撃がアステリオスの下へと飛んでいくが、纏っている雷部分は領王の杭に避雷針の如く吸収される。こんな時でも腹話術を忘れない領王は大したものである。

「あーん！ たかし様が死んだ！」

「た、たかしダイーン!!」

黒焦げになるイエニチエリのたかし君、人肉の焦げ付いたにおいがコロツセオに充満し、唇が油でべたつく。

「ふむ、これでは死なんか。なら今度は連射で行こうか。『雷鳴轟く主神の偽槍』」

ふと振り向くと、そこには一人の男が立っていた。鋭き眼光を持つ堂々とした風格を持つ男。その周りには雷を纏った槍が並べられていた。

「ここであつたが幾千年、死ぬがいい。余の恥部よ」

「『くっ！ させるか!!』な、なにをするたかし!!」

襲い掛かる雷槍、それに対し盾となるかのように一人前に立つ（というよりウラドに放り投げられた）たかし。槍はたかしをすり抜けるが、その槍の持つ雷はたかしが避雷針となりすべてを吸収していく。

「『ぐ、ぐああああああああ!!』た、たかし！ やめろ！ そんなことして何になる!!」

「ぐあああああ！ い、いたい!! さきつてる、さきつてる!!」

すぐ後方ではアステリオスがなんやらわめいているが気にしない。むしろ邪魔であつた。

『へへっ、ドジ踏んじまった』たかし、お前何を……』

『そんな、なんでたかしがこんなことに』

「たかし！ 約束してくれただろ！ 俺たちと一緒に聖杯コロッセオに優勝するつて……』

「また我を置いて先に逝くか、たかし！ 許さんぞ!!」

『ごめんね、みんな。どうやら僕はここまでみたいだ』  
「たかしい……』

ぐだ子は涙を堪えきれなかった。あのたかしが、みんなを励ましてくれたような気がするたかしが、今こうして最期の時を迎えているのだ。後ろのアステリオスがうるさかったが、みんな気にしなかった、眼中にもなかった。

『領王、最初。君と僕は敵同士だった。今でも覚えている。僕が串刺し刑にされて、君はそんな僕の前で食事をとっていたね』

徐々に体が透けていくたかし。それはまさに彼が座に帰ってしまうことを意味していた。

『最初はなんて無神経な男だろうと思っていた。トゥルゴヴィシユテで死にきれず、君の串刺し刑に処せられた時は辛かったよ』

あれ、これたかししゃべってね？ もはや腹話術でもなんでもなかった。たかし普通

にしゃべれるやん。まあそれはそれで感動するな。ぐだ子はそう思った。

『でも、君の判断は正しかった。王とは、そうあるべきだ。どれ程の苦難であろうと乗り越えようとする。僕は君に殺されたことを誇りに思う。君という英雄と戦えたことを誇りとしよう』

「たかし、なぜお前は余の配下ではなかったのだ」

『決まっているさ。僕はオスマンの兵だ。君がワラキアを愛したように、僕もオスマンを愛していた。ただ、それだけじゃないか……』

沈痛なる面持ち、皆たかしとヴラドの話を聞き入っているのだ。

『平行線だよ、僕らは決して交わることはない。僕は兵士、君は王じゃないか。そうだ、王様なんだ』

「たかし……」

『ありがたい、ヴラド。君と共に戦ったカルデアの日々は、とても楽しかった。ああ、楽しかったんだ……。僕はオスマンの人間だけど、僕にとって、王様は君だった』  
黒焦げで表情もわからないたかし。けれど、ぐだ子は何故かたかしが笑っているような気がした。

『ありがたいヴラド。極刑王、ヴラデイスラウス・ドラクリヤは僕の王様なんだ……』

「たかしいい……!!」

『君は吸血鬼なんかじゃない。誇り高きワラキア公だ。前を向いて、もう君は「血塗れ王鬼」なんかじゃない』

「・・・・・・・・!!」

ボロボロに涙を流すヴラド、それは長年の友人であるたかしだからこそ表に出せる彼の表情であつた。そう、何をするにも一緒だつた。たかしを杭にさし、或いは大車輪と言いながらたかしを振り回し、そして今回はきれいな串焼肉と化したたかし。楽しかつたあの日々は刻々と流れる。

『ありがとう。さようなら、僕の、友達・・・・・・・・!!』

たかしは最期にそういつて消えていった。後に残つたのは一本の杭だけだつた。

「うあああああああああ!!」

堅く、強く握りしめた杭は手が焼けるほど熱く、たかしが先ほどまでいたことを明確に示すのであつた。

見据えるは、雷槍を持つ男。ヴラドは、いや極刑王は力強く投擲すると、叫んだ。思いの丈を以て、強く、強く。天まで届くように・・・・・・・・!!

『極刑王』——!!』

彼の誇りは決して汚せない、それは王である矜持。そして友との約束故だつた。

## 親父たちのF／GO 後編 父と王と

『極刑王』——!!』  
カスイクル・ベイ

その日、彼は王となる。

いいや、彼は真に王となったのだ。

何一つ報われることなく、誰一人見向きもされない孤独な王が、初めて誰かの為に戦おうとした瞬間であった。

爛々と輝く眼、堂々たる覇気。まさしく王と呼ぶにふさわしい威風と備えていた。

だがそれは相手として同じ！ 動じることなく彼もまた笑みを浮かべる。

「邪魔立てするならば容赦はせん、『雷鳴轟く主神の偽槍』」

それはまさしく弾丸、それも十や二十ではない数百にも及ぶ雷霆の射出。

「往くぞ極刑王、なに死ねば死んだらですぐに会えよう。さらばだ」

振り上げた手を今まさに下げようとしたとき、一陣の風は吹く。敵は眉を顰め、こちらは何事かと混乱の渦にある。

それは鳥だった、いいや、ただの鳥じゃない。巨大な怪鳥であった。

されど禍々しさはなくどちらかと言えば神聖な雰囲気を持つ大鳥。そして、その背中

にはうごめく影があった。

「……………あれ？」

「知っているのか!? ギル電！」

その怪鳥を見て首をかしげる我らがソフトバンク王。心なしか額には汗が滲んでいた。

「いや、まさかそんな……………」

いまいち要領を得ないソフトバンク王、しきりに首を横に傾げながら、怪鳥の様子を注視すると、うごめく影は雷槍の主との口論になっていた。

「——邪魔立てするか? ライダー」

「ぬかせランサー、先に手を出したのは貴君であろう。如何な理由があらうと、感情に任せて手をあげるとは裁判官として失格では？」

「あれは余の恥部だ、余の罪だ。ならば責任を以て余が消さねばならん」

「ここで殺したとしても結局は座に帰るのみだ、それは貴君の本意か？」

「——」

「頭を冷やせ、貴君らしくもない……………」

「ふん、興が覚めたわ……………」

鳥に乗ったライダーはランサーにそう告げると、ランサーは己が背後に装填した雷槍



を下げ、背を向けて帰ってしまった。

「やれやれ、すまない。あれは真面目な男でね、厳格で頑固なのが傷だが、決して悪い男じゃない。君らに迷惑をかけたことを謝罪しよう」

怪鳥の主はゆつくりとこちらへ近寄り、そして会長から一人の偉丈夫が舞い降りる。

黒の頭髮に、鍛え上げ、隆々とした筋肉。整った顔立ちに加え、どことなく品のある雰囲気と物腰。おそらくはどこかの貴族や王侯ではないかとぐだ子は想像した。

「……………!?!」

そしてそんな彼に対し、普段では想像もできないほどに目を見開き、真っ青な顔色を浮かべる男がいた。

「いえいえ、困ったことはお互いさまですよ、貴方は……………」

「そうですね、名乗らせていただきましょう。私の名前はルガルバンダ。これでも故国では英雄王と呼ばれていた身、以後お見知りおきを」

「……………ゴフウ」(白目)

助けて、ギルが息してないの。今までの余裕と慢心はどこに行ったのか、この金髪にチャン兄、泡吹いてるよ。

「久しぶりだね、ギルガメツシユ」

笑顔を浮かべるパパガメツシユ。なんだろうとても優しそうな笑顔なのに、とてつも

なく恐ろしく感じてしまうのは。

「……………」

「その頭髮はどういうことかな？　ちよつと説明してもらつてもよろしいだろうか」

「……………」

「どうして、目を逸らすのかな？」

「ぼ、僕の名前は閔智一です。ギルガメツシユつてなんだろー、ドルアーガかなー（棒）」

「……………あれは確か十一歳の夏の暮だったかな。当時君は、侍従の制止を振り切つて山に——」

「やおお父上！　お久しぶりですね、いやはや壮健で何より。僕もお父上のような偉大な方を得て大変うれしゅう——」

「山に——」

「ごめんなさい、すいません、誠に申し訳ございませんでした。お父様、お父様本当に申し訳ありませんでした。何卒、何卒その話は平にご容赦ください……………!!　謝ります、謝ります故、僕が悪かったから！　ね、頼むよ！　ね！　お願い！」

「よろしい」

片腹大激痛。なんだこの英雄王面白れえ、流星にかの尊大な英雄王ですら実の父には敵わないか。

「おっと、これは申し訳ない。貴女がギルガメツシュのマスターだろうか、いやはやどうもうちの倅が迷惑をかけているようで済まない。父として深く謝罪しよう」

「おい、なんだこいつ。すごいまともつぽいぞ。ソフトバンク王、本当にお前こいつの子供？」

「ははは、ギルガメツシュは母親似だからね、私とはてんで違う。出来た息子だよ、本当に」

「父上エ．．．．．」

ギルガメツシュは一人、苦笑を浮かべる。神嫌いな彼のことだ、そう言われてうれしいことではないのだろう。

「なにをしているライダー．．．．．」

そんな彼らの様子を見て近寄ってくる影、顔には一閃の大きな古傷、白髪の髪に髭を生やしているが、老人という訳ではなく、年頃で言うところと三十半ばか、隆々とした筋骨はバランスがとれ、鞣した革の鎧に背中には大剣を背負っていた。

そんな男に対して、身体を震えさせながら出てきた一人の姿、我らがすまないさんだった。

「ジークムンド王！　なぜジークムンド王がここに．．．．．逃げたのか？　自力で脱出を？　ジークムンド王！」

まさか、という問い。彼はあのすまないさんの父親であるジークムンド王なのか？

「誰だ貴様は………?」

非常に不愉快そうに眉を顰める白髪の男。そんな彼の下へ向かおうと、歩みを進めるすまないさんは控えめに言って不気味だった。

「ジークムンド王オオオオオオオオ!! ウツ!!」

「彼はジークムンドではない」(無言の腹パン)

無言の腹パンを決めた英雄王ルガルバンダ、ヒユウ、さえてるぜ。

「一体全体何なのだ彼奴等は………?」

困惑するジークムンド(仮)、そりやそうだろう、いきなりこんな状況になったらそうなる、私もそうなる。

「ああ、セイバー。なに倅とたまたま会ってね。昔話に花を咲かせていたところだよ」

ようやく得心が言った白髪のセイバーは無理やりにもとりあえず納得した。

「息子か、そうか。ならばそれ以上話すのはやめておけ、ただでさえ情があるのにそれ以上剣を鈍らすことは無かろう」

「忠告、痛み入る。だが安心してくれ、私の息子は強いぞ、こつちが手加減する暇もない。昔は可愛かったんだけどなあ………今じゃこんな風に非行に走ってしまったようだ。改心したと聞いたんだがね」

「教え方が悪かった、貴様の不備だ。その点俺は間違えなかったがな」

「ははは、痛いところをついてくる」

鼻息を荒くし、腕を組む白髪のセイバーはジロリとこちらに視線を向け、品定めするかのようによろしく目を向ける。

かなりの手合いだろう。先ほどのランサーといい、どいつもこいつも覇気というものを持つている。おそらく彼らは王なのだろう。

普通に考えれば、王同士で協力するなど本来はあり得ない、王と言えどいつもこいつも我が強いのが普通だ。家でいえばギルガメッシュがその最たる例だ。

自分こそが世界の中心、同格などあり得ない。

「忠告はした、精々足を引く張るなよ……」

「貴様、誰に向かって口を聞いている」

高圧的な言葉に対し、真つ先に反応したのはルガルバンダではなく、ギルガメッシュだった。

あれが貴様の倅か？ セイバーはルガルバンダに視線を送ると、ルガルバンダは頷く。成る程、とんだ問題児のようだ。セイバーは深く息を吐き出した。

「ルガルバンダだ、そもそも、俺と彼奴の問題だ坊主。指図される謂れはない。これは俺とライダー、ランサーとの三人で交わされた約定だ。上もなければ下もない、常に同格

だ」

悠然とギルガメツシュに目を向けるセイバー、カリスマも、能力も、全てギルガメツシュに劣つてなお、折れること無き気高い精神性、誇り高き英雄は、この程度で言葉を撤回するつもりはないのだろう。

「口を挟むな、小僧。奴の苦悩を知らずに、奴を弁護とは片腹痛い。」

——無論、俺が言うことでも無いだろうがな……」

自嘲するような、皮肉めいた笑みを浮かべてセイバーはセイバーは背を向ける。そして、ルガルバンダの苦悩とは一体。疑問の残る答えに何も言えないぐだ子たち、ただ、後ろのアステリオスがうるさかった。

「どうしても気に入らんならば、俺を打倒してみろ、幸いこの場はそういうところだろう。己が力を以て、己の正しさを証明せよ」

力が無ければ何も出来ないのだから、振り返ったセイバーの瞳にはひどく哀しそうな色があった。

その瞳の前だからこそ、彼らは何も言えなかった。

「ギルガメツシュ」

穏やかな声調で、ルガルバンダは息子に語り掛ける。

「聖杯コロッセオに出る以上、ギルガメツシュ。君とは敵同士だ、手心は加えるつもりは

ない。たとえそれが親子であろうともだ。それが英雄王と呼ばれた私と、君の矜持だ」  
柔らかな笑みを浮かべるルガルバンダ王。彼のギルガメツシュの父親だとしても、英  
霊の格としては息子であるギルガメツシュと比べ数段格は劣る。

それでもなお彼の瞳に恐れや焦りはない。たとえどれだけの困難であろうと超えて  
きた誇りを胸に、彼は息子の前に立ちはだかる。

「全力で来るといい、息子の全力を受け止めずにして王以前に父と名乗れようか。胸を  
貸してやろう、どんと来い！」

「……父上、わかりました。ですが、我は強いぞ——」

それはあのギルガメツシュが慢心を捨てた瞬間でもあった。いつもそうだった、思い  
浮かべば、王として、英雄として父の背中を追ってきた生涯だった。誇り高く、神々に  
寵愛され、世界を統べるバビロンの英雄王。ギルガメツシュが憧れ、焦がれた人物だ。

「口調が悪い、そんな風に育てた覚えはないぞ」

「あつ、すいません」

「まあいいさ。勝つてこい、お前の父は、強いということを証明して見せよう」

怪鳥を引き連れ、悠々と過ぎ去る偉大なる父の背中は、昔よりも大きかった。少なく  
ともギルガメツシュはそう思ったのだった。

# 親父たちのF/GO ステータス

【元ネタ】ギリシャ神話

【CLASS】ランサー

【マスター】

【真名】ミノス

【性別】男性

【身長・体重】182cm・81kg

【属性】秩序・善

【ステータス】筋力B 耐久C 敏捷B 魔力B 幸運D 宝具B

【クラス別スキル】

対魔力：B

魔術発動における詠唱が三節以下のものを無効化する。

大魔術、儀礼呪法等を以ってしても、傷つけるのは難しい。



## 【固有スキル】

神性：B

神靈適性を持つかどうか。高いほどより物質的な神靈との混血とされる。

クレタ島の女王エウロペと主神ゼウスの息子であり、死後冥府の裁判官として神格化されている。

カリスマ：C

軍団を指揮する天性の才能。団体戦闘において、自軍の能力を向上させる。

カリスマは稀有な才能で、小国の王としてはCランクで十分と言える。

陣地作成：A

魔術師として、自らに有利な陣地を作り上げる。

“工房”を上回る“神殿”を形成することが可能。

クノツソスの都を創設し、建築に造詣が深かったことがあげられる。

## 【宝具】

『雷鳴轟く主神の偽槍（ケラウノス・タウロス）』

ランク：B 種別：対人宝具 レンジ：1〜50 最大捕捉：1人  
 ゼウスからエウロペに与えられた決してなくなることも無い槍にして、必中の槍。それは主神の持つ雷を模して造られた偽槍でありながら、主神の持つ槍と同じ名を持つ神槍。

投げ放たれれば雷を纏い、対象をホーミングし、敵を穿つ。決してなくなることが無い故に何発もの装填、連撃を可能としており、それは槍というよりも弾丸に近い。

『天星の猟犬（ライラプス）』

ランク：D 種別：対人宝具 レンジ：1〜3 最大捕捉：1人  
 ゼウスから与えられた猟犬。

探知能力と追跡能力に優れており、判定次第で気配遮断を看破しうる。

護衛もこなすが、戦闘力は高くない。

なお、ランサーはラエラプスと遠方からでも意思疎通が可能な装飾品を所持する。  
 destinationで活躍中です。

### 【解説】

願い、自分の恥部をなくしたい、厳密に言えば、妻が獣姦し、アステリオスが生まれるという悪夢をどうにかしたい。あんな化け物に父親と呼ばれたくないし、妻があんな

ことになるというトラウマをどうにかしたい。だって俺悪くないもん（自己弁護）  
異名は断罪王

【元ネタ】メソポタミア神話

【CLASS】ライダー

【マスター】

【真名】ルガルバンダ

【性別】男性

【身長・体重】200cm・96kg

【属性】中立・善

【ステータス】筋力A 耐久B 敏捷A 魔力C 幸運A 宝具A

【クラス別スキル】

対魔力：B

魔術発動における詠唱が三節以下のものを無効化する。

大魔術、儀礼呪法等を以ってしても、傷つけるのは難しい。

騎乗：A+

騎乗の才能。獣であるのならば幻獣・神獣のものまで乗りこなせる。ただし、竜種は該当しない。

【固有スキル】

神性：B

神霊適性を持つかどうか。高いほどより物質的な神霊との混血とされる。太陽神ウトウを祖父に持ち、死後神格化された。

神々の加護：A

妻ニンスンやイシユタルなどの層々たる神々からの加護。局地的な面で、助言や、優先的な幸運を得るなどの支援を受けられる。

カリスマ：C

軍団を指揮する天性の才能。団体戦闘において、自軍の能力を向上させる。

カリスマは稀有な才能で、小国の王としてはCランクで十分と言える。

## 【宝具】

『敬いし付与の霊鳥（イムドウグド）』

ランク：A 種別：対軍宝具 レンジ：1〜50 最大捕捉：100人  
 ライダーと心を通わした霊鳥アンズー。

時としてライダーの騎乗する鳥となり、その特攻能力は対軍規模の破壊力を与える。  
 ほかにもライダーの敏捷値と筋力値を強化するなどの支援を行い、人鳥一体で敵と戦う。

## 【解説】

パパガメツシユ、人類最古の英雄王？ 俺のことかな？

天の禊、それ選ばれた存在である生まれながらにして最強を約束された息子。

生まれながらにして定まった生を生きる彼に対し彼が思ったことは哀しみだった。

この世には彼と対等な存在はないということが、彼の胸を締め付けた。

そのために協調性を高めたはずなのになんかああいう性格になった、解せぬ。

【元ネタ】ウォルスング・サガ

【CLASS】セイバー

【マスター】

【真名】 シグムンド

【性別】 男性

【身長・体重】 191cm・85kg

【属性】 混沌・善

【ステータス】 筋力A 耐久B 敏捷B 魔力C 幸運D 宝具A

【クラス別スキル】

対魔力：B

魔術発動における詠唱が三節以下のものを無効化する。

大魔術、儀礼呪法等を以ってしても、傷つけるのは難しい。

騎乗：B

騎乗の才能。大抵の乗り物なら人並み以上に乗りこなせるが、

魔獣・聖獣ランクの獣は乗りこなせない。

【固有スキル】

神々の加護：A

戦争の神オーディンの加護。

精神干渉、及び痛覚によるペナルティ、毒を無効化する。

カリスマ：C

軍団を指揮する天性の才能。団体戦闘において、自軍の能力を向上させる。

カリスマは稀有な才能で、小国の王としてはCランクで十分と言える。

心眼（真）：B

修行・鍛錬によって培った洞察力。

窮地において自身の状況と敵の能力を冷静に把握し、その場で残された活路を導き出す。『戦闘論理』

逆転の可能性が1%でもあるのなら、その作戦を実行に移せるチャンスを手繰り寄せられる。

【宝具】

『運命られし破滅の剣（バルンストック）』

ランク：A+ 種別：対軍宝具 レンジ：1〜60 最大捕捉：500人  
 神樹バルンストックに突き立てられてた魔剣にして、のちの魔剣グラム。  
 太陽剣と呼ばれたその剣の原型は炎を纏い、敵を切り裂く猛火の剣である。

### 【解説】

ザ・セイバー。超平均的なセイバー。普通に強い。ジークフリード？ 誰だそいつは、知らん。

願いは息子（シンフィヨトリ）の救済そして報いること。たとえ不義の子であったとしても、愛すべき妹と、自身の間にも生まれた唯一の息子であり、自身の復讐の道具としてしまった子。その生涯に、その功績に報いることが出来なかったことこそ彼の嘆きだった。

顔も知らぬシングルドより、娶った妻より、幼いころから養育し、ともに数々の死線を潜り抜けた。愛と罪悪感を背負ってでも育てた息子を愛すなどということなど、それこそ不可能だろう。

大人の事情で振り回された愛息子の為に、彼は戦うのだ。

あと、下戸であり、すぐに酔っぱらう。

異名は勇壮王



## ジヤパニーズF／GO

カルデア総会議。それはカルデアにおける問題の撤廃の為に議長であるぐだ子が設立した会議である。

今回、栄えある第一回会議がこの場で執り行われようとしていた。

「よく来たな有象無象ども！ お前らの上司であるこの私に従えっ!!」

「先輩先輩、せっかく得た絆ポイントを溝に捨てる行為はやめましょう」

始まるや同時に暴言を吐くぐだ子に対し諫言するマシユ。しかし、なぜか知らないが鬱憤の溜まったぐだ子の怒りはその程度では収まらない。

「うるせー！ お前は何時になつたら絆ポイントがたまるんだよ！ いつになつたら最終再臨するの!?! お前の胸のマシユマロ揉んでやろうかあ。あゝんゝ!!」

「や、やめてください——ああ、痛いッ!! すごく痛い、やめっ、ちぎらないで……!!」

そのマシユマロは豊満で柔らかかった。ぐだ子は哀しくなった。

「浜風エ——!!」

「あの、ぐだ子ちゃん。浜風はF／GOじゃなくて艦これだから、マシユと似てるけど違

うから」

D r. 浪漫による微妙なフォローも意に返さず、ぐだ子はマシユのマシユマロを掴んだまま、会議に移った。

「くそツ、こんなにイライラしたのは久しぶりだ。レフの首についているもじやもじやを引きちぎりたい気分だよ」

「懐かしいなオイ」

今は亡きレフ教授。カルデアが分裂する前は考古学における権威であり、ヨーロッパにおけるフン族の研究を主としていた紳士であり、口癖は「アツティラ王は最強なんだ」と言い続け、最期に救世主に塵となって殺された。

時々「中村アー」とうるさかったし、携帯ゲームとソシャゲーを愛し、D r. 浪漫にはいろいろなゲームの攻略法を隣にいたヤクザっぽい人と共に教えてくれた優しい人だった。

「レフのことはどうでもいい、重要なことは別にある！ お前ら、協調性を持てよ!!」

「きよ、協調性ですか……」

協調性という言葉に真つ先に反応したのは騎士王と名高いアルトリアであった。彼女の生きていたブリテンは協調性皆無の騎士たちによってポロポロになって最後には自滅したという悲しい過去があった。

「そうだ、協調性だ。お前ら纏まりがないんだよ。ちゃんと協力し合ってる？ この中にいるサーヴァントの半分以上と私戦ってきたんだよ。特にエリちゃんとカーミラとか、邪ンヌとジャンヌとか、ジルドレとジルドレとかお前ら同一人物だろ!!」

同一人物だから気に入らないんじゃないだろうか。マッシュと浪漫は訝しんだ。

「だから私は思った。お前らに足りないものを見つけ出したよ」

「……足りないもの？」

数々の業績を上げた英雄に対し足りないものとは一体何か。数々の部門において負けることはないと言われる彼らに対して、足りないと言わしめているもの。そう、それはまさしく。

「政治的機関だ」

「……「政治的機関？」」

「そうだ、お前らに足りないもの、それはひとえに政治力だ」

「さて、まさかこの私に政治力が無いとでも言うのか？」

そう反論したのは、我らがデブであるカエサルである。

確かにカエサルの能力は非常に高い、軍事的、そして政治的にも傑出しているといつていいだろう。だが、足りない、それでは無理なのだ。

「確かにお前は優秀だ。だが駄目だ、元老院に嫌われて最終的に暗殺されている。オク

「タウイアヌスと呼んできて、どうぞ」

「余は！ 余はどうじゃ!!」

「元老院を完全にコントロールしてオクタウイアヌス呼んできて、どうぞ」

「バッサリとローマにおける施政者を切り捨てるぐだ子。そもそも、やり方が古いのだ、もつと時代にあつたセンセーショナルでアタッチメントな政治をクリエイトしてほしいものである。」

「先輩意識高いですね」

「黙れもぐぞ」

ねじる、そのマシユマロを。これでもかと言うほど揉み込みながらぐだ子は会議を進める。

「そもそも君主は私だ。そうでなければブレーンが動かない」

「ブレーン?」

「ブレーン? そんな人物がいるのだろうか。浪漫は眉を顰めて考えた。」

「そもそも、ローマではいささか古い。きちんとした制度を整え、卓越した官僚制度と軍制を進めないと世界なんて救えないんだ。要は物量だよ、人だよ。人材が居なければ話にならない。高々英霊召喚してそれをすり潰すという体制で何もかもが上手くいくと思つたら大間違いだ。傑出した個が死んだらそのまま何もかもが失敗するなんて危う

すきんす

「ええ……」

「きちんとした大本営を施設、行政機関の設置、交通網・経済・技術の発展、現地住民との会話と融和を進めつつ最善最短で事態の根源を潰す。これがよっぽどスマートな方法じゃないか」

「ぐうの音も出ない正論だけどF/GOのシステム全否定じゃないか……」

少数精鋭？ 何それ美味しいの。世の中数と技術の充実だよ。

「という訳で、先生をお呼びしました。入って来てください」

ぐだ子がそう呼びかけると、扉が開き、人影が見える。

ぐだ子が用意した人物。それは一体誰なのか、最悪はぐだ子に悪いことを吹き込んだとして排除せねばならないだろうか。

会議の空気が重くなる中、入って来たのは二人の人間。

一人は軍服姿の男であり、もう一人は背広を着た男。どちらも年頃は壮年であり、そしてどこか見たような人間だった。

「えー自己紹介をどうぞ」

ぐだ子がそういうと、彼らはぐだ子に一礼をして自由に自己紹介をした。

「大日本帝国陸軍元帥大将。ランサー、山縣有朋である。見ての通りただの武弁であり、

殿下から拜命されカルデアにおける行政府の長官となった。軍人たるものが政権を握ることに對して拘泥たる思いがあることは承知だろうが、職務を拜命した以上妥協することなく日本、ひいては世界を救うことに全力を尽くす所存だ」

「私は田中角栄、キャスターだ。ご存知の方も、そうでない方もおられるだろうが、小学校高等科卒業である。各人英雄とされ、数々の部門において優れた業績を上げた立派な方であると思われる。私は主に経済と交通、財政を握る立場である。昔大蔵大臣としての職務に就いた焼きまわしになるが、いささか若輩たる身であるがトゲの多い門松をたくさんくぐつてきて、いささか仕事のコツを知っている。……一緒に仕事をするには互いによく知り合うことが大切だ。われと思わん者は誰でも遠慮なく私の下に來てほしい。何でも言ってくれ。上司の許可を得る必要はない。……できることはやる。できないことはやらない。しかし、すべての責任はこの田中角栄が背負う。以上」

「という訳で新しくカルデア行政府長官になる山縣元帥とカルデア開発局局長である田中角栄氏である」

「その二人、毀誉褒貶激しくないか!!?」

「紛糾する会議。ややついていけない様相を見せる人物もいる中で、茫然とするものや反対するものも出てきた。」

「不敬ですな、処断いたしましょうか殿下」

「こいつのマシユマロだけ処断して」

「やめてくださいいしんでします」

山縣がぐだ子の耳にそつと囁くと、ぐだ子はそう返した。

「ああ、あと顧問官としてもう一人いるんだけど、もう大層な歳で動けそうにないからこ

こで言っておくね中○根○根○弘元首相っていうんだ」

「まだ生きてるのあの爺さん!?!」

「うん、まだ生きていたみたいでカルデアのすぐ外で保護したんだ」

「外から!?! 異能生命体か何かかよ!?!」

「凄いで中○根、海軍主計少佐は伊達じゃない。」

「やはり中○根は凄いな」

「ふむ、まさに国士と言えよう」

角栄と山縣はうんうんと頷きながら二人して中○根元首相を讃えていた。

「ていうか、殿下って何ですか? 先輩ってもしかして高貴な生まれとか?」

「うーんそうなのかな? 生まれは別に庶民なんだよね、ただ苗字が東久邇ってだけで」

「まさかの宮様!?!」

東久邇で殿下。まって、このSS消されたりしないよね!?

浪漫はやや焦りながらも、辺りを見渡していた。

「うちの初代の名前がね、稔彦って言うんだ。総理大臣してたっていう。それで世界滅びたから、今存命している日本国の皇族の血を引いているのって私だけみたいなの。だからカナ、有朋凄く優しいんだよ」

「まさかの名前呼び!?!」

ジャンジャジャン、今明かされる衝撃の真実!

ぐだ子、内親王で現在天皇の位に一番近い人物だった。

「「「あばばばばばばばば」」」

「先輩大変です! 日本英霊の皆さんが息してません!」

「別に隠していたつもりはなかったんだけどね。普通に知ってる人だっていたでしょ」

「東久邇で天皇家に縁有るかどうかわかるなんて普通外国の人は知りませんよ!」

現在進行形で右翼団体に喧嘩売ってる件について。あーもうめちやくちやだよ。

「ん? と言うことは皇族で現在残っている最も古い王朝の血筋がぐだ子になるのう。

プレミア感マシマシじゃの、是非もないネ!」

「ノッブ、なんでお前こんな時でも平常運転なの!?!」

ただ一つ変わらない第六魔王。それがノッブ。このカルデアで唯一キャラがぶれ



ないという稀有な存在であった。

「そもそも、政権が気に入らないなら倒せばいいじゃろう。武力討伐でも政治的な失脚を狙つてもいい。そういうふうには戦いを選んだなら、そういうふうには立ち向かつてもいい。そういうことじゃろ」

「おつしやる通り！ こちらの政策よりもそちらが優れているというなら喜んで採用しましょう、こちらの政権が嫌ならカルデアが壊れない程度での政権の奪取すら認めましょう。それが政治なのだから」

「嘘だろ、ノツプがまともそうに見えるなんて……」

ノツプの問いに答えたのは角栄であった。終始にこやかな笑みを崩さずに、英霊に立ち向かっている。

誰よりも劣っている代わりに、その結集した政治力だけはここに居る人員の中でも有数と言えよう。

「まあそのー、いろいろと言いたいこともあるだろう。特に私は新潟の田舎出身の農民だ。ここには生まれた人種も、国も、そして掲げる方針も違うと思う。だが、ここにこうして集まっている以上、自分の生まれた国、或いは世界を救いたいとそう決めているのだろう。ならば、私たちは同じだ。全員が同じ目標に向かつて戦っている。」

時には喧嘩もするだろう。或いは同じことを思っているのに主張が食い違うことも

ある。私は党人政治家だ。しかし、山縣長官は藩閥だ。彼は清廉で、私は俗物だ。それでも国を、国益を想う気持ちには変わりない。正直言つて世界の命運などどうでもいい、日本がちゃんとそこに有ればそれでいいとも思つてゐる。

だが、物事はそうはいかない。今、世界は未曾有の危機に瀕してゐるんだ。立ち向かうことが出来るのは私たちしかない。だつたらやるしかないだろう。それしか出来ないんだから、それをやるんだ、誰よりも何よりも真剣に取り組もうじゃないか。なあなあはやめよう、適当にしちやだめだ。諦めずに立ち向かつて、精一杯に頑張つて、それで最後に皆で上手い飯を食える世の中を作ろうじゃないか

「田中の言う通りだ。正直言つてわしは貴様らが嫌いだ。英雄なんぞ、居なくてもいい。わしは常々そう思つてゐるよ。わしは何よりも国家を尊ぶ、日本と言う国を何より尊ぶ。日本人が日本人として生きれる国は日本しかない。だからこそ戦う、だからこそ学び、慎重に歩みを進め、そしてほかの欧州列強に対等でありたいと願つた。幾分か古い頭であろうし、批判されてしかるべきかもしれない。事実間違ひも多く行つてしまつた。それでも人は失敗から学べると思う。」

戦後日本は偉大であつた。わしの愛した国は、敗戦からもう一度立つことが出来た。失敗から学べた。それは純粹に嬉しいと思うと同じに、とても悲しいことである。多くの犠牲を払わなければ、成し遂げ得なかつたことであるからだ。

英雄の最期は大なり小なり悲劇に彩られているものである。諸君らの最期はどうであつただろう。そのミスや、間違いを、そのままにしておいていいのだろうか。人間は学ぶ生き物だ。人間は立ち上がることでできる生き物だ。

わしは諸君らが嫌いだ、だが、諸君らの能力は否定しない。その能力を見せてくれ、その能力を以つて、世界を救つてみてくれ。嫌つても構わない、憎んでも構わない。ただ、世界の為奉仕してくれるのであれば、私は諸君らを十二分に使つて見せよう。誠意努力し続けよう。この山縣有朋の身命に賭して誓おうではないか」

それは彼らの覚悟、彼らの偽らざる気持ちであつた。

国家の為ならば他国の不利益などどうでもいいと言えるそんな彼らを紛いなりにも協力させ、一致させているのは他ならぬぐだ子の存在故だろう。それ程に、彼らの生きた時代にとつて天皇とは、皇族とは重い物だつた。

こうして、田中角栄と山縣有朋の両名は新たにカルデアにおける行政の担い手として認知されることになった。

終始にこやかになると思つたのもつかの間、山縣は懐から書類を取り出すと、次々に英霊たちの人事を告げた。

「さて、まずは人事異動を命ず。新しく造兵廠へヘンリー・ジキル氏とニコラ・テスラ氏を……」

「私の方ではまずレイシフト装置の見直しからカルデア内の区画整備を行いつつ、レイシフト後におけるインフラ整備に関するマニュアルの作成、後は来年における予算案の作成等に移りたいと」

ついに始まるカルデアの大改革、またの名を酷使無双。英霊たちは近代国家のやり方についてこられるのか、それとも時代に取り残されたしまうのか。

強い軍団は強い組織と優れた兵装があつてこそ果たされる。そこに英霊ぶち込んだら本当に最強になれるのか。

ぐだ子の貞操を守り、日本再興は叶うのか。

頑張れカルデア、頑張れサーヴァント！ 技術の発展が世界を救うと信じて！

次回、核兵器開発！

ソロモン王死す

カルデア大勝利

の、三本立てでお送りいたします。

希望の未来にレディー、ゴーツ！

# ジャパニーズF／GO ステータス

【CLASS】 キャスター

【マスター】 ぐだ子

【真名】 田中角栄

【性別】 男性

【身長・体重】 164cm・60kg

【属性】 中立・善

【ステータス】 筋力E 耐久E 敏捷E 魔力E 幸運C 宝具D

【クラス別スキル】

陣地作成：EX（A）

土建会社としての社長としての知識と現場力を以って得た技能。

魔術師としての「大神殿」を大きく上回る、

政治家として日本列島そのもののインフラを形成することが可能。

本来はもっと低いランクであるが、宝具の効果によってその能力は比較的に向上して

いる。

道具作成：―

魔術的な道具を作成する技能……などない。

精々生活に仕えるちよつとした小道具程度の作成である。

【固有スキル】

カリスマ：B+

軍団を指揮する天性の才能。団体戦闘において、自軍の能力を向上させる。

カリスマは稀有な才能で、一国の宰相としてはBランクで破格と言える。

なお効果にはムラがあり新潟県民と自派閥の党人政治家にはAランクぐらいの変な効き方をしている。

「私が田中角栄だ。小学校高等科卒業である。諸君は日本中の秀才代表であり、財政金融の専門家ぞろいだ。私は素人だが、トゲの多い門松をたくさんくぐってきて、いささか仕事のコツを知っている。……一緒に仕事をするには互いによく知り合うことが大切だ。われと思わん者は誰でも遠慮なく大臣室にきてほしい。何でも言ってくれ。上司の許可を得る必要はない。……できることはやる。できないことはやらない。しかし、すべての責任はこの田中角栄が背負う。以上」

黄金律：B

身体の黄金比ではなく、人生において金銭がどれほどついで回るかの宿命。

大富豪でもやっていける金ピカぶりだが、散財のし過ぎには注意が必要。

事実、あまりにも金をバラマキ過ぎて金権政治と政治腐敗を巻き起こした。

「政治は数であり、数は力、力は金だ」

貧者の見識：A

相手の性格・属性を見抜く眼力。

言葉による弁明、欺瞞に騙されない。

裏日本と言われた日本有数の豪雪地帯である新潟県に生まれ

裸一貫から一国の宰相にまで成り上がった機会に恵まれた角栄が持つ、相手の本質を  
掴む力を表す。

「人間は、やっぱり出来損ないだ。みんな失敗もする。その出来損ないの人間そのまま  
を愛せるかどうかなんだ。政治家を志す人間は、人を愛さなきゃダメだ。東大を出た頭  
のいい奴はみんな、あるべき姿を愛そうとするから、現実の人間を軽蔑してしまう。そ  
れが大衆軽視につながる。それではダメなんだ。そのの八百屋のおっちゃん、おばちゃ

ん、その人たちをそのまま愛さなきゃならない。そこにしか政治はないんだ。政治の原点はそこにあるんだ」

【宝具】

『日本列島改造論』

ランク：D 種別：対国宝具 レンジ：37.8万km<sup>2</sup>（日本列島総面積） 最大捕

捉：約1億400万人

田中角栄が提起し、そして多くの課題を残した彼の政治的戦略。

地方と都市を結び交通網を発達させることで地域の過疎と大都市の過密をなくすことを目標としつつ、インフラや情報網の発展などの成果と東京一極集中や国と地方自治体に多大な借金を巻き起こした失敗を呼んだ彼の功罪そのものである。

その能力は一途に交通網の発達とインフラ向上、地方発展を呼び込み、キャスターの意思を以て必要な場所に必要な経済的資源を与え、交通網の施設によって流動的な国家を作り上げるものである。

簡単な説明をすると、キャスターの力で道路や新幹線、しまいには空港を無理矢理生み出して、それを施設する能力である。

【解説】



ニーガタの英霊（ガチ）である田中角栄。日本でも功罪、毀誉褒貶の多い総理大臣であり、最終学歴は小学校高等科卒、或いは中央工学校である。

主張はかなり左派であり、大衆人気がある庶民派。人心掌握の天才でありバイタリティーのある「コンピュータ付きブルドーザー」として自由民主党内で、一大派閥を築き上げたNOUNIN。

【CLASS】ランサー

【マスター】ぐだ子

【真名】山縣有朋

【性別】男性

【身長・体重】171cm・66kg

【属性】秩序・中庸

【ステータス】筋力C 耐久D 敏捷B 魔力E 幸運C 宝具A+

【クラス別スキル】

対魔力：E

魔術に対する守り。

無効化は出来ず、ダメージ数値を多少削減する。

【固有スキル】

戦略：A

多人数を動員した戦場における戦術的直感力ではなく、国家単位で行われる戦争の経過や平時における国家の発展目標を定めることを最上としたスキル。

相手の対軍宝具、対城宝具に対処する場合に有利な補正が与えられ、Aランクともなれば対国宝具の行使にも補正が掛かる。

山縣の場合、それは国家間における戦争の遂行とその落としどころを探る軍政治家としての能力が非常に高く、

西南戦争では全軍の参謀として、戊辰戦争や日清戦争では司令官としてその手腕を振るった。

明治維新・革新：A

時代の革新者たる英雄に与えられる特殊スキル「革新」。

ランサーの場合、更に明治維新の文言が追加される。古きに新しきを布く概念の変革。

「神性」や「神秘」のランクが高い相手や、旧体制の守護者たる英雄などであるほど、自分に有利な補正が与えられる。これによりランサーは「神性」や「神秘」を持つ英霊や、宝具に絶対的な優位性を誇る。究極の相性ゲーである。

さらに、倒幕、士族反乱の鎮圧という騎士階級の踏破者であるランサーは騎士階級の者に対し特効のごとき優位性を保つ。

逆に神秘性の薄い近代の英霊、主にランサーより新しい英雄などには何の効果もない。それどころか自身の各種スキル、宝具の効果が落ちる。

勇猛：B

威圧・混乱・幻惑といった精神干渉を無効化する能力。

また、格闘ダメージを向上させる効果もある。

歴代首相経験者の中で唯一首相在任後に戦線で指揮を振るった経験者であり、「わしは一介の武弁」として生涯政治家でなく軍人としてあり続けた。

【宝具】

『長州山縣閥』

ランク：A+ 種別：対国宝具 レンジ：― 最大捕捉：―

山縣有朋が創り上げた官僚制度と山縣自身がこれと思った人材による近代日本の軍

事、政治官僚たちの総称。

極めて優秀な人材における国家運営を行う上で山縣の手足となって働き、近代国家である大日本帝国の礎になったその所以ともいえる。

すなわち山縣の庇護を受けた官僚や軍人、そしてそれを行う施設、物資の召喚であり、山縣が指揮した奇兵隊の兵士から西南戦争の折りに総軍の作戦を任されたときの軍勢などが主に矢面となって戦う。

しかし、幾ら召喚が可能とは言え、山縣を嫌う人間は多いので召喚に応じない場合もある。

〔Weapon〕

『無銘・槍』

山縣愛用の槍、若き頃から武で身を立てようとした頃から、

晩年に至るまで素振りを日課にすることから山縣にとって最も繋がり深い一品と言えよう。

【解説】

明治日本における必要悪にして偉大な元勳。

国軍の父と呼ばれ近代日本の官僚制度と軍事制度を創り上げ、文官任用令の制定や軍部に大きな影響を誇った元勲中の元勲。

政党政治を批判し、超然主義として後の党人政治家や非長州閥の軍人、国民にすら批判されながらも国家の為に奉仕し続けた。

晩年に有つて様々な功罪を持つが、その心はひとえに国を思い愛国心に満ちた「一介の武弁」そのものである。

## 源氏たちのF／GO ごつつええ源氏

「ぐーだだだだだだだだ！ お前は私のカキタレになるのだあ!!」

カルデア内部、レイシフト装置の前でぐだ子は笑っていた。

「や、やめ………ヤメロー!!」

ボコボコに殴られ、今まさに苦しんでいるグランドキヤスターことソロモンはぐだ子に対する恐怖に身をすくませますがままであった。

「返してほしくばオルガマリーを雌奴隷にする権利を私に与えろー!」

「くう、死んだ人は蘇らないというのに、なんてことをいうんだ………」

もはや半泣き。ぎよろぎよろとうごめく半魚類の目が心なしか怖い。というよりリヨ絵になっているぐだ子であった。

「畜生、レフはアルテラ厨になるわ、アンドロマリウスはハイスクールD×Dの世界に行ってしまうわ。魔柱をいくら呼び出してもそっちの救世主に倒され続けるは。もうどうしていいかわからないよお、ふええ………」

仕舞いには幼児退行。魔術王と呼ばれたカリスマはもうない。

こんな時に、不思議なことが起こったらなあ………。そんな風にただ助かりた

い、すがりたいの一心だった。

「待てーい!!!」

そんな思いがYHVHに届いたのか、どこか遠くで救いの声上がる。あの姿、あの様子、間違いない。アレはヒーローだ!!

「何奴!!」

ぐだ子がそう叫ぶと、ヒーローたちは次々と現れる。

その姿、まさしく痴女。腹は出しているわ、尻尾には狸の尾を生やしている何かのブレイ中に見える淫乱系雌犬近親相姦至上主義者。

「源氏ライダー!!」

その姿、まさしくポイン。溢れ出る色香と母性。そして彼女もまた清純系オネシヨタ近親相姦至上主義者。

「源氏バーサーカー!!」

その姿、まさしく畜生。親が死んだ頃を見計らい、自分を高く売りつけ、そして自らの欲望のために自分の兄を嵌め、甥っ子たちを皆殺しにした源氏一族随一の黒歴史。卑劣な武士だ……。

「源氏ライダー!!」

その姿……まさしく見えない。え、何やったのこいつ。誰? っていうか誰

?

「源氏ライダー!!」

その姿、まさしく「傲れる者も久しからず」。九州で好き勝手やった結果、最終的に朝廷に殺された源氏の恥さらし。バーサーカー以外適正クラスがない大馬鹿者。

「■■■■■■■■■■!!!」

日本語? バーサーカーが喋れるわけないでしょ。

「二」五人そろって、源氏レンジャイ!!!」

「■■■■■■■■■■!!!」

一人だけ言えていないやつがいるがこの際どうでもいいのだろう。

「さあ、早く逃げるんだー!!」

「ありがとう!!」

「早く逃げ……あつ」

ソロモンを起き上がらせ、立たせたは良かったものの、そのまま喋れないバーサーカーに突撃した結果。憐れ爆発四散。ソロモンは一瞬で切り殺される。ナムサン!!

「おのれ、リヨぐだ子! ゆゑる。ざん。!。!。!。!。」

「……」

ソロモン……いい奴だったのかな……?



疾うに死体と化し、その遺骸を喋れないバーサーカーがつまんでいるのを横目に、ぐだ子に向き合う源氏レンジャイ。

「違う」

「えっ?」

だが、その言葉を両断するかのようにぐだ子は続ける。

「違うよ、何? 君ら何?」

「源氏レンジャイ……」

渋々といった様子で牛若ライダーが呟く。一体何がおかしいのか。ちゃんと源一族で統一したというのに。何が問題なのか、彼女には理解不能だった。

「源氏レンジャイじゃないよ。君クラス何よ」

ぐだ子はそういうとまず頼光バーサーカーを指さす。

「源氏バーサーカーですよ?」

何を当たり前のことという返しであるが、そもそも喋るバーサーカーとは如何なものか。ぐだ子はそう思った。喋って狂化がほとんど機能していないんじゃないかとそれバーサーカーとは言わないんじゃないか。そんなニーガタの不満を同様に述べた。

「君は?」

「■■■■」

「あ、源氏バーサーカーです」

喋れないバーサーカーに代わって範頼アサシン……もとい範頼ライダーは応えた。

「五人そろって」「二」——源氏レンジャイ!!」「三」

「待て待て待てい。タイムタイム」

範頼ライダーが応えるとまるで様美式のように掛け声を決める源氏レンジャイ。

「源氏レンジャイじゃないよ、なんでクラスかぶってんねん」

どうやらクラス重複がお気に召さない様だった。別に聖杯戦争で全クラスすべてセイバーの聖杯戦争もあるかもしれないのにそれを認めないとは何と心の狭いことか。

「源氏ライダー」

ぐだ子の肩を叩き、アピールする淫乱狸の牛若ライダー。ちよつとかわいいと思いつつもぐだ子は平静を取り戻す。

「ま、まあ、君はいいよ。君は?」

「源氏ライダー」

爽やかに名乗りを上げる範頼ライダー。影が薄いなりに頑張っている所作であった。

「じゃあ、その畜生」

最後に残ったの髭面の男。なんだか一番信用できそうにない男であった。

「源氏ライダー！ 五人そろって」「二」——源氏レンジャイ!!」「二」

「違あーう!!!」

この人は何を怒っているのだろうか、カルシウム足りてないんじゃない？

畜生ライダーは不思議に思った。

「おかしいよ……なんでパーサーカー二人でライダーが三人いるんだよ……」  
久々に突っ込み役に回るぐだ子。流石の彼女もこの事態は想定してなかった。そもそもこのF/GO短編集で同じクラスのオリジナルサーヴァントが出てくるなんてことは前例に無かった筈だ。

「いや、クラスとかじゃないから」

「は？（威圧）」

「そうですね、一人ひとりの個性を見てほしいです」

畜生ライダーがそう発言すると、牛若ライダーが繋ぐ。

「おま、お前らそんなこと言ったって。クラス以前にお前らの人格とかがもうアウトだから。個性見せちゃダメでしょ」

「はあ……」

「それに、ちびっこには見た目が大事だろ。お色気枠とか言って、その痴女のような恰好もいかなものかと」

「そこは、努力で何とかなかって行くだろ」

「いや、努力って……」

努力って何を努力すればそうなるんだよ。ぐだ子は一人ため息をつく。

「同じライダーに見えるけど、彼女とかすごいお兄さん思いだし。良いエピソードとかあるんだけど」

「いや、そいつ最終的に喧嘩別れして死んだやん。範頼も誅殺されたし」

「源氏的には当たり前のよくあることだゾ？」

「えっ？」

身内を謀殺するのが源氏的に当たり前？ え、何それ怖い。

畜生ライダーは破顔してそういった。卑劣な一族だ……。

「そ、そんなことはいいんだよ。兎も角クラスだよ。そういったタイプとかばらけさせないといけないっていう話をしてるんだよ。武器が皆して馬ってどうよ、仮面ライダーじゃないんだから」

レンジャイを名乗っているのにライダーはあまりに不自然。ぐだ子はそう言っつて源氏レンジャイを批判する。

「……………」

沈黙する源氏レンジャイ。そんな中、一人のライダーが口を開く。

「兄上と同じこと言ってる」

『いやいや九郎、なんでクラスを重複させるんだ。そうするんだっいたらいつそ全員ライダーにすればいいのに』そういった頼朝の声を牛若は思い出していた。

「そら君のお兄さん正しいよ」

「ですよね!!」

ぱあつと顔を上げる牛若。兄上頼朝の命は何を置いても優先される。そういった表情だった。そのくせ朝廷から独自に官位をもらったりしていたのはなぜなのか、これがわからない。

「ならば、しょうがないですね、私がアサシンになりましょう」

「あ、いいの。範頼くん!」

そう言つてクラス変更に同意する範頼くん。やはりぐだ子にとっての癒しであった。

「あら、じゃあ私もアサシンに……」

「いや、なんでだよ!!」

「いや、同じ一族ですし」

「みんな同じ一族だろうがよオオオオオ!!!」

なにこいつ怒ってるの? カルシウム足りてないんじゃないかね? 畜生ライダーは訝し

んだ。

「ていうか区別つかない!! 範頼くんと痴女とママは知ってるけど君ら誰だよ!!」

「え、俺を知らない? 情弱かな」

「■■■■——?」

「源氏マニアでもあるまいし一目見てわかる訳無いだろ。義経と頼光ですら女体化して  
るんだぞ。無理に決まってるわ。ていうかお前はいつまでソロモン食ってるんだ!!」

人肉を食むキチガイサーヴァントに戦々恐々しつつ、ぐだ子は理性のないバーサー  
カーからソロモン(死体)を取り上げる。もう原型をとどめてないミンチよりひどい状  
態だった。

「ええー、そんなにいい? 俺たち有名やよお、めちやくちや有名やよお、義経より有名や  
よお、なんでわかんないんかなあ?」

イラッ、ぐだ子か目の前の男に殺意を覚える。

流石にその状況に辟易したのか、牛若は恐る恐る切り出す。

「と、いうことは今日は戦わないのでしょうか」

「当たり前だろ、常識的に考えて」

おずおずと語り掛けるバーサーカーを尻目に、ぐだ子はそう返す。

「戦えるわけないだろ、こんなぐだぐだな状況で、もう一回話し合いたいよ。そもそも  
そっちのバーサーカー言語野失ってるし、ソロモンの肉は食うてるわ、ヒーローちゃう

がな」

「はあ………」

はあ、じゃねえよ。むしろお前ら怪人側じゃないか。

天狗に育てられた奴と、妖怪混じりと、死んでも四回蘇る奴。まともな人間だけど性格が畜生が一人。本当にまともなのが範頼しかいない。

「一族なんですよ、だったら話し合った方がいいよ」

そう告げるぐだ子だったが、源氏レンジヤイは皆一様に顔を曇らす。

「ごめん、俺このバーサーカー知らないんやけど」

畜生ライダーは頼光ママを指さして言う。

今明かされる衝撃の真実、この言葉に流石のぐだ子も声を失う。

「いやいやいや………、一族じゃないの?」

「今日が初めてですね」

「祖父ちゃんの姉ちゃんってことしかわからん。会ったことも無いわ」

畜生ライダーと頼光バーサーカーは二人して頷く。

「一族………仲間じゃないのかよ………!?!」

「いや、生まれた時代が違いますし」

「私が摂津源氏で………」

「俺ら河内源氏やから……」

「あ……、そっすか……」

これには何とも言えない微妙な雰囲気が漂う。

「それは、もう駄目だよ。無理無理、もつと話し合つて。クラスとかちゃんと決めてな、まだ戦うのは早いよ」

ぐだ子は頷きつつ源氏レンジヤイにそう指導する。

「タイムムーンだつてもう16年だぞ。このソシヤゲで一本立ちしても15年からだからな。この作画で」

そう言つてぐだ子は自身のリヨっている状況を見せつける。

「はあ、じゃあわかりました」

渋々といった状態で源氏レンジヤイたちは一応の納得を見せる。

こういうのもなんだが、こういった白けた状況で戦うのは非常にいけない、そう思うだけの常識はリヨぐだ子は保持していた。

「うん、そうだな……、そう、来週ぐらいに会おう。それでその答えを私に見せてくれ」

そんな、儂げな笑顔を見せて、彼らは笑いながら別れた。



その言葉から一週間後の時が経ったレイシフト装置の前でぐだ子は立っていた。

「ぐーだだだだだ！ お前はレフ・ライノールから野田洋二郎になるのだあ!!」

「嫌だあ、前前前世なんて歌いたくないよお!!」

ハットをかぶっていればみんな同じ人間かと思えば大間違い。しかし、ぐだ子はそれほどまでに強硬だった。

「お前は私の口噛み酒を飲むのだア!!」

「いやだあ、アルテラのが呑みたいよお!!」

涙を流しつつ。それでもいや待てよ、これはご褒美ではと思いつつ一応嫌がるそぶりを見せるレフ。

しかし、神・・・・・・・・YHVHは見捨てていなかった。

「待てーい!!」

部屋の中に響く声、その声に対しぐだ子は真っ先に反応する。

「何奴!」

約束を守ってくれた。そうぐだ子は信じていた。そう、この瞬間まで信じていた。

その姿、空から響く雷霆。勇壮たる背中は広く大きいその姿。その姿に、在りし日の頼朝は憧れた。彼こそまさに源氏を代表する英霊、まさしく武弁たる若武者の装いその

ものであった。

「源氏セイバーツ!!」

その姿、まさしく畜生。戦国の世に生まれ、裏切りと策謀によって成り上がり、やがては江戸を代表する譜代の大名となった成り上がりの家、かつては賤ヶ岳の七本槍の一角として名を挙げたその男は、畜生かつ有能な小物だった。

「源氏ライダーツ!!」

その姿、まさしく無能。ただ、皆の笑顔が守りたかった。それでも、彼には力がなかった。無能で、どこまでも弱者故に、彼は否定された。ただ、彼に間違いがあるとしたら、生まれた時代そのものを間違えた。それでも彼はその汚名を背負う。それが多くの人の救いになると信じて。

「源氏（に殺された）ライダーツ!!」

その姿、まさに朝家の守護。かの英雄源頼光の系譜にして宝具、雷上動を受け継ぎし弓の名手。老いて尚も壮なりしもの、そして源氏で最も高位に登り詰めた努力の人。

「源氏アーチャーツ!!」

その姿、まさしく農家。歳は四十半ば、泥に汚れ、小脇に農作物と肩に鍬を背負った古墳時代の農家のおっさん。誰だお前はっ！

「わしじゃよっ!!」

いや、知らんがな。

「五人そろって」「二二二」——源氏レンジヤイ!!!!「二二二」

「誰だアアアアアア!!!」

在りし日の面影はない。そこには全く知らない新しいゴレンジヤイがそこにいた。

## 源氏たちのF／GO ごつつええ源氏？

「おい誰だ、このあらすじ書いた奴？」

「なにも間違つてはいないですわね」

あながち間違いではないことが何よりの間違いではないか？　ぐだ子は訝しんだ。

「……………」

ぐだ子はちらりと新源氏レンジヤイを見る。そして不意にそつと目を逸らした。

「もうやだよ、突つ込みたくないわあ……………」

こんなカルデアいやや、こんな鯖いやや。来世は黒髪のイケメン男子にしてください！　そんな風にぐだ子は叫びたかった。

もうギャグ短編としてどうかしている？　そもそもぐだ子は本来はボケ側の人間である。そんな人間が今ツツコミの立場にいる。これがどれ程のストレスかと言えば当の本人しかわからないであろう。

「さあ来い、リヨぐだ子！」

「この我々が貴公を討ち取って進ぜよう!!」

「おとなしく金目の物を出せ!!」

「和平結ぼう、な！」

「おーほれ、ウチの畑ばとれた野菜や、みんなで食べね？」

「混沌カオスツ!! くつそ混沌カオスだぞツ!!!」

誰一人として協調性がない。いや、上二人は一応真面目っぽいが、それ以外の面子がどうにも頼りないというか、ガチ勢過ぎるというか、もう……なんていうんだろ……。こう……なんというか、帰りたい……。

「ちよつと、なんていうんだろ。もうアレだ！ 話し合おう、そうしよう！ ちよつと情報が欲しい。想定したのと違いすぎる！」

とりあえず、円を描くようにそれぞれが座り、ぐだ子は少しずつ情報を整理していく。「とりあえずさ、まず。前回の面子と全員入れ替わっているんだけど。これはどういうこと？」

そう、先の源氏レンジヤイの面子はバーサーカー源頼光にライダー牛若丸、ライダー源範頼、そして謎のライダーと喋れないバーサーカーという面子であった。

一応源氏で統一されていたものの、話は聞かないわ、ヒーローとしての人格が怪しいわ、影が薄いわ、そもそも喋れないわ、怪人っぽい奴が多いわ、クラスは重複しているわひどいものだった。

「とりあえず、自己紹介からしていこう。まずはその安牌そうなお兄さんから」

そう言うてぐだ子がまず指名したのは鎧を身に纏ったいかにもといった若武者であり、若武者は荒々しい笑みを浮かべるとゆっくりと口を開いた。

「——俺か、いいだろう。俺は源氏棟梁播磨守義朝が嫡子、鎌倉源太義平だ」

「クラスは？」

「セイバーだ、ちなみに享年は20歳。生きの良い敵と戦えると聞いたんでなあ、可愛い妹の代わりに来てやったという訳だ」

「うーん、やや戦闘狂の気があるがまともだ。クラスもセイバーとなんかリーダーっぽい」

あれ、問題はあるにはあるが結構まともなのでは？ いや、あの源氏推薦の面子である、油断はしてはいけない。

「え、えっと、では次はそちらの男性で」

「某か……」

やや精強な面持ちでありながら、直垂を身に着けた品のある男性。それが目の前の男の第一印象であった。

「某は、源三位入道頼政。或いは馬場頼政と申す。此度の一件、我が高祖母より命を受け、参じた。クラスはアーチャー、若輩ながら弓の腕には少々自身があります」

「おいおい、70いった爺が若輩ならみんな赤子になっちゃうわな」

「ハハハハハ——!!」

少々冗談を飛ばすお茶目な面を見せつつも、その姿には気品というものが身についている。これが武と文化を極めた上流武士というのだろう。

正直いつてすごいまともである。なんだあいつらちゃん仕事してんじやないか。ぐだ子の機嫌がよくなり、次第に期待も大きくなる。

これは、いけるんじやないか？

「じゃあ、次はその武士」

月代を剃り、額に弾痕が残る歴戦の武士を思わせる男。明らかに装備とかが鎌倉武士っぽくないが、ワンチャンあるかもしれない。そう思った。思ったかった。

「私か、私は脇坂甚内安治。クラスはライダー」

「ダウト！ お前源氏じやない!!」

お前藤原氏じやねーか!! 源氏ちやうやろオ——!!

そんな怒りが、ぐだ子の胸に強く到来した。

「それは、家の亨ちゃんが勝手に言ったことだからノーカンド」

「誰だよ亨ちゃんって」

「倅」

脇坂安元、龍野藩脇坂家二代当主であり、幼名は亨であった。

「安元の藤原氏宣言ってかなりガバガバだったじゃねーか! ありなのかよそれは!!」  
「ええんやで」

「よかないわい!」

よろしくニキーwwwと安治は笑っているが、ぐだ子にとつては頭痛の種である。

「ていうか、なんでお前が来ちゃったの? 誰だよ呼んだ奴」

「えっ? マブダチのサブちゃん」

「誰だよ! 前回いたかそんな奴」

英霊サブちゃんってなんだよ、北島三郎かよ。

「んん? 居なかつたか? 顎鬚伸ばして、飄々とした感じのクソ爺のライダー」

「あいつかアアアア!!!」

思い出すだけで腹が立つ。妙に煽りを入れてくる人間の情というものを解そうとしていない畜生ライダーのことであった。

「確か本名が新羅三郎義光だったか」

「え、え、ツ! クソ大物じゃねーか!!」

新羅三郎頼光。あの八幡太郎義家の弟にして文武両道の貴人。源義忠暗殺事件を起こし、源氏を弱体化させた戦犯でありながらその血族は常陸佐竹家、弓馬の名門小笠原家、甲斐武田家へと伝わった武家の名門中の名門の祖とされる男だった。



個人的武勇の腕も高く、流鏑馬と言えばまずこの男の名が挙がるといつても過言でなく。音楽を愛し笙の達人であった。

「げ、幻想が……！ 私の幻想が崩れていく……こんなこと、源頼光が女だったことぐらいにシヨックだ」

「いい夢見れたかよ」

「ゲットバックカース奪還してくれ、私の幻想を。しかし、脇坂の「無理やで」の一言で現実の重さを思い知る。」

「ほかの二次創作作者に頼むんだな。きっと清廉潔白な新羅三郎義光を描いてくれるよ」

「外道じゃない新羅三郎もそれはそれで違和感があるな」

「なんだろう、この複雑な気持ちは？ 恋かな？」

「そんな風にボーっとしていると不意にレイシフト装置が起動してとある男が現れる。鯉と聞いてやってきました！」

「山古志は錦鯉専門だろオ!! 良いから放置していたレフを連れて新潟に帰れ!!」

「了解、頼んだよ後藤田君！」

「不意に現れた角栄はレフを連れ去り、昭和三色を一尾だけおいて警察庁長官であった後藤田正晴と共に帰って行った。」

「後藤田さん英霊になつてたんだ」

不意にそんな言葉を漏らすと、源氏レンジヤイ? は各々好きなように口走る。

「川路利良が英霊になれるんだ、警察庁長官がなれないはずがないだろ」

「中曽根さんいるんだから、あつて行けば良かったのに」

「官房長官か、羨ましい。ああいう立場が、一番楽だろうになあ」

「ほー、誰かと思うたが、ありや忌部氏の末裔か」

「この鯉食つていい?」

ぐだ子は目頭を抑える。発言一つ一つに時代を感じるといふか、現代に馴染みすぎとちやうか? そもそも最近の子供は後藤田正晴を知っているのだろうか。

「ああ、そういうえば後藤田正晴は英霊じゃなくて礼装粹らしいぞ。『内閣官房長官』というな」

「身も蓋もないなその礼装」

「あとは『たかし』つていう礼装が……」

「聖杯コロッセオ……うっ、頭が……!」

「あと畠山庄司次郎重忠の絵が描かれた『まともな庄司』という礼装に源実朝の『金槐和歌集』だな」

「あと年老いた大江広元が泣いている『広元やある』という礼装もありましたな」

『金槐和歌集』の絵がちょうど甥っ子……実朝が切り殺されている絵だからな、シンパシーを感じるよな」

「やめろよ泣くわ!!」

「この作者鎌倉幕府厨かよ！ 広元と実朝の別れのシーンは崇高？ 知ったことかッ!!」

「架空の英霊作れよ！ なんで架空の礼装まで考えているんだ!!」

「英霊を一体作ったら礼装を五個から六個ほど作らなければなからう？」

「そうそう、ガチャの確率的にな」

「ガチャの話はするなアアアア!!!」

ガチャに嵌り、お金が解けていく恐怖をぐだ子は誰より知っている。けどやめられない止まらない。なあに回す方のノツブがいるからヘーキヘーキ。

「おめえでえじよぶかね、ほれ、うちでとれた胡瓜食べんね。うんめえぞ」

「農家のやさしさが身に染みる——!」

あ、みずみずしくておいしい。味噌とかつけるとさらにベネ!

「あ、私の所だとれた魚もあるからやるわ、大洲の魚とミカン」

「ほう、フグであるか」

「ヒレ炙ろうぜ」

「わしの秘蔵の酒を出そう。こういうのは皆で飲んだ方がいい」

「ほお、こんげごつつお久しぶりやね」

「自由か！ お前らツ!!」

そんなぐだ子の心も知らず、男どもは和氣藹々と名産に心躍らせ、次々と準備に取り掛かる。

「漬けとつたもんあるけ、それつまみにすつぞ」

「せつかくなら何か狩つて来よう。源太、着いてくるか？」

「いいな、あの源三位と肩を並べて狩りか。生前じゃ想像もしてなかったな」

「身は食うなよ、てつぼうにあたる訳にやあ、いかんからな」

「ふむ、彼らをもてなすとして、肴は味が濃いものか、癖の強いものがいいじやろうな。酒も辛口がヒレに合おう」

そして各々行動し、頼政と義平はレイシフト装置で狩りに赴き、農家のおっちゃんも漬物を取りに戻り、安治は七輪に火を灯し、少々小太りの男は酒を取りに自室へと戻って行った。

義平と頼政は猟から帰り、立派な鹿を狩って帰ると、農家のおっちゃんや小太りの男、そして脇坂安治と共に宴会を開始、わはらわはらと笑い、踊り、盛大に楽しむ。

そんな中、宴会の空気に惑わされぐだ子はただひたすら、胡瓜をかじっていたので

あった。

「忘れてた、こんなことしてる場合じゃないじゃん」

宴会もそろそろ終わりに近づき、程よく酔いが回ってきたところでぐだ子はそう言った。

「え、なんでだ？」

「何!? 今宵はそれぞれの遺恨を流しともに酒を組み交わす機会ではなかったのか!」

「せっかく、戦わなくてもよい時代になったのであろう? ならば、この平和を甘受せねば勿体なからう」

「つくはー! うんめえな!!」

え? 宴会が目的じゃなかったの? と驚く男性陣三名とすでに出来上がっている農家のおつちやんに頭を抱えつつ、一人沈黙を保つ安治に目を向ける。

「チツ、これだから勘のいい女は嫌いだ。酔いつぶれたところで絞めようと思つたのにな……」

「ヒエツこわい、マジにしか聞こえない」

一瞬で酔いがさめた。流石小早川秀秋に隠れているとはいえ、関が原で裏切りを敢行し、その後ものうのと生き延びた男がいう言葉だ。表面でうまく隠しているが、言葉の裏側に妙に殺意を隠している。

「なーに、ジョーク、ジョーク。戦国ジョークだ。マブダチの三郎が好色だったせいで武田信玄がバイになるぐらいのジョークだ」

「それはジョークというより遺伝では？」

信玄もあれはあれで信義？ なにそれ美味しいの。で条約破り大好きの外道武将の一角だ。明らかに遺伝であろう。小笠原は文化、佐竹は武を受け継いでいると考えると妙にしつくりくる気がする。

「ていうか、二人ほど聞いてないんだけど。えっと、何だっけ……」

「もう忘れてきてんじゃねーかお前！」

雰囲気の流れされた結果、最早何が問題であったのかすら忘却の彼方に飛んでいったぐだ子。男たちのガハハハ——！と笑う声を聞きながら、必死に頭を動かす。

「そうだ、源氏レンジャイだ。源氏レンジャイがおかしいんだった。よし、脇坂はほおつておこう」

「えー、無視イ？ 甚内寂しい」

「黙れ黙れ！ お前は隣の男と乳繰り合ってる!!」

「ごめん、俺一穴主義だから。男となんて無理っすわ」

「フアツ!!」

何?! 戦国武将≡衆道ではないのか?! おいどういことだ、説明しろノツブ!!

『わしにそんなこと言われても?』利家の初体験はお前じゃないのかよーツ!!!!

「そもそも女複数とか無理っすわ。ハーレムとかありやろくなもんじゃない」

「確かにな、嫁は一人で十分だ。わしも立場が無ければ、新たに室を迎えることも無かつたろうな」

「嫁と言われてもなあ。俺、嫁とそんな詳しく話したこと無かつたからなんとも言えないな」

不思議、武将と言えれば奥さん作つて美女囲い込んでいるという風潮は彼らにとつては効きはしない。

「立場があれば、それ相應の室を抱え込まねばなるまい。だが、某が真に愛した女性は菖蒲だけだ」

「嫁はなあー、繋がりつちゆうもんを深めるためにや、不可欠だわな。地方ば、地方で固まらんや、とつてもでねえが、たべてけんのや」

あれ? 農家つてただの農家と思つていたが、もしかして地方の有力豪族だったりするの?

でもなんていうんだろう。みんな英雄と言つても結構ストイックなのね。

「子供も、可愛くてのう。目に入れても、痛くない……」

「うちの亨ちゃんも、真つ当に育つてくれてよかつた。あれは、私の誇りだ」

「置いて行っちゃまったんだア、そうしなければあかん。分かつたはずなんになあ」

「某に付き添って死んだバカ息子も、生き残って血脈を残した息子も、娘も、幸福な生涯と言えればそれでよい」

そんな、頼政の言葉に対して面を上げたのは、源氏レンジヤイの一人である小太りの中年だった。

「三位………」

「今更でありましょう、内府殿。朝廷に踊らされた、馬鹿な男と思ってください」

「父は、其方を信用していた。きつと、源平問わず、貴方を友として信用していたのです」  
「………」

「無知なわしは、無能なわしは……、貴公の心中を察することは出来ない、それだけに、あの一連の件は驚きました。まさか……そんな思いが強かった」

「某は貴公が嫌いだ。おそらく、植え付けられた想いなのでしょう。捻じ曲げられた記憶が、まるでまことしやかに某に囁く。貴方に好感など持てない。それでも其方に言うのなら」

緊張が、部屋に孕む。義平はじつとして待ち、安治は何処から取り出したであろう十文字槍を片手に持ち、農家のおっちゃんには静かに動向を見守っていた。

「済まなかった。再び戦乱を起こしたことを、お前はただ、平和を望んでいたというの



に……」

「弱きは、ただそれだけで罪。そんな時代に生まれた、わしが愚かだったのでしょ」

……しんみりと、空気が重くなる。

なんだこのシリアスは、ギャグだったよね。この作品。時々重くなったり感動的になつたりするのはなぜだ。

なまじたかし死亡からのウラド覚醒がある分前例を作ってしまったことは失敗だったのでは？

「改めて、申し上げましょう。わしは内大臣、平家棟梁平宗盛と申す、戦に負けたどうしようもない愚か者よ……」

「あ、はい……」

……なんだろう、突っ込める雰囲気じゃないぞ？

ていうか、空気がそういう空気じゃない、何だろうこれ、しんみり？ 郷愁？

「あのお……、そのお……平氏なので、源氏レンジャイではないですねはい」

ぐだ子が何とか声を出して言えたのはそのぐらいだ。だってこのオッサン、地味に重い。

「わしが平家の棟梁のおかげで鎌倉幕府が立ったと思えば、最も源氏に利益を与えてる

と言っても過言ではないでしょうな………まったく、愚かなことではありますが、  
 ははは………」

「だれか、だれか助けて。これはあんまりズケズケいっちゃダメな奴だ。私だって空気は読める、常識はあるんだッ！」

「そんなぐだ子の願いが生じたのか、レイシフト装置が起動すると。一人の少女が現れる。」

「やーいクソザコナメクジこれでもくらえッ!!」

宗盛を死の淵に追いやったものだけが、宗盛に石を投げなさい。

そんなキリストの言葉を免罪符として牛若は宗盛にパイを投げつけた。

「家族守れなくてどんな気持ち? 家族全員死の淵に追いやってどんな気持ち? ねえ

今どんな気持ち?」

「ニーガタの英霊ってやつ牛若アンチだろ絶対!!」

だって、天才とかむかつくし。そんな作者の願いがこの作品に詰まっている。

この世界の神作者はいとも残酷である。

「これ以上の牛若は見るに堪えない、しまつちやおうねえ」

ありがとう、しまつちやおじさん。CVは全然F a t eとは関係ない人だけど。

「型月作品で見るとＣＶ中田譲治は皆勤賞だっけ」

「信長もいっぱいいるしな高崎信長回す方釘宮理恵と回さない方神奈延年と野望の方」

「最後コーエーテクモじゃねーか！」

「探せばもつといそうだな」

ふむふむと頷き合う新しき源氏レンジャイ。そこで脇坂がいいことを思いついたとばかりに提案してくる

「いいことを思いついたぞ、ＣＶ〇〇つて入れれば読者も良い感じに脳内補完してくれるんじゃないか」脇坂安治ＣＶ大川透

「てめえ如きが大川透とか片腹痛いぞ」

「おめえ、頭いいな」源義平ＣＶ清川元夢

「クソ似合わねえぞ」

「なるほど、では某も」源頼政ＣＶさかなクン

「声優ですらねえ——！！！！」

「人気声優を使えば、わしにも人気が……」平宗盛ＣＶ釘宮理恵

「ネタキャラじゃねーか！！！！」

「わしじゃよ」農家のオッサンＣＶ青山ゆかり

「のじゃろりでもきつい！！ しかもエロゲ声優じゃねーかッ！！！！」

「ちやぶ台をひっくり返すぐだ子、気分は雷親父だ。

しかし疲れる、こいつらといるとすごい疲れる。すさまじいほどのポケの応酬だ。

「リヨさんは誰であろうか」CVさかなクン

「ここは、あらゆる英霊を統べるマスターとしての実力を買って、あの人しかいないだろう」CV大川透

「いいのではないか? わしは反対しない」CV釘宮理恵

「俺も賛成だ」CV清川元夢

「ほうか、ならばええな」CV青山ゆかり

「二二」リヨぐだ子のCVは若本規夫で「二二」

「私は今までそんな低い声でしゃべってたというのかよッ!!」リヨぐだ子CV若本規夫

「よかつたな、BASSARAの信長だぞ」CV大川透

また信長が増えるのか、壊れるなあ。

「銀英伝のロイエンタールでもあるな」CVさかなクン

ロイエンタールは設定を並べていくとなるうの主人公とかでよくある人になったりする人だったりする。

「ジャイアントロボの戴宗だな!」CV清川元夢

むしろお前が雷属性なんですそれが……。

「コード・ギアスのシャルル皇帝という大身分であったものであるのう」CV釘宮理恵  
ルルウーシユ（低音）。

「マスオさんじゃ!!」CV青山ゆかり

「穴 子 さ ん だよッ!! マスオさんはジャムおじさんの中の人だわ!!!」CV若本規夫

なぜか、息が荒くなる。こんなにもゼーハーゼーハーというのは小学校の頃のマラソン大会以来の久しぶりなのではないか。

幸いにも重苦しい空気からの脱却には成功したのでまずは良しとしよう。

「そもそも私がお前らを気に入らないのはただの農家のオッサンを仲間に入れていることなんだよオ!! CVもういらねえ!!」CV若本規夫

「短気な娘だ、これがキレル若者って奴だな」

「二十歳の俺がいうのもなんだが嘆かわしいな」

「黙れこの裏切り者と脳筋武者!!」

これだから世評を顧みない鬼畜畜生小物戦国武将は嫌いなんだ。最終的に堀田氏から養子をもたらって譜代と化し、子爵になって明治維新も生き抜いている勝ち組だ。貴族だ! 平民とは違う上級民だ! 妬みだとか僻みとか言われるがとにかくすごく嫌いだ!」

「ぐだ子殿、心の声が漏れておるぞ」

頼政に窘められた。やや恥ずかしい。

しかしぐだ子はめげない、こいつらを認めてたまるか。ヒーローってのはもつとこう救われてないといけないんだ。

「あれは彗星かな・・・・・・？ いや・・・違うな。彗星はもつとこう、バアーって動くもんな」

「いえ、アレはティアマト彗星でしような」

「おつ、前前前世ながれちやう系？」

「話聞けよお前らツ!!! 自由か、フリーダムか!! もう11月だぞ！ いつまで『君の名は。』引きずってるんだよ!!」

ああそうだよ、近年まれにみる良作だったよ!! だからってFate二次創作に持ち込むことじゃないからな!!

なんか突如として農家のおっちゃんがしまっちゃんおじさんの中の人の名言言ったことに驚きつつもぐだ子は身をすり減らしてツツコミを続ける。

「致し方なからう、ニーガタの英霊は『君の名は。』を視聴して長いこと筆が進まなくなりましたからな」

「あと自動車学校で忙しかったってさ」

「ニーガタの英霊のことなんざ誰も聞きたないわ!!」

作者のリアル、それはただの言い訳、はつきりわかんだね。

「気に入らねえんだよ、小説の最初に処女作とか豆腐メンタルとかで予防線張る奴なんて!! 読者の批評あってこそその小説だろう!!」

ぐだ子は叫ぶ、その思いの丈を。目いっぱい、思いつきり。しかし反対に叩き付けられるのは冷たい現実の波だった。

「いや、なろうならともかく、ハーメルンの二次創作でそこまで本気で書く奴いないだろう。二次創作なんか所詮作者の自己満足だぜ。書籍化の芽もないし、精々遊び半分だ。趣味の範囲だ」

「書物など、所詮は売れるか売れないか。そんな厳しい世界じゃ。印税でクラスなど所詮は夢のまた夢、わしのような無能のように身の丈に合わない行為をすると必ずや後悔することになろう」

「某も聞いたことがある、その昔、なろうやにじファンにはまって、留年した高校生の話や受験に失敗する中学生」

「おいおい、そんな奴いるのかよ、所詮は遊びの範疇だろ? きちんと割り切って、学生なら将来の為に勉強しろよ……」

「ヤメロー聞きたくない!! そんな現実聞きたくない」

空想の中でぐらい、自由に生きたつていいじゃないか。涙を流し、前を向く、だって、だつてそれでも彼らは二次創作を描くんだ。

「それでも、それでも私たちは書き続けるんだ。駄作だとしても、未熟だとしても、見るに堪えない痛い黒歴史だとしても！面白いと思つたから書きたいんじゃないかッ!!」  
それが、何よりの叫び。ぐだ子のそしてハーメルンの二次創作作家たちの想いと信じ  
て——!

「——こんなSSの場面で、何マジになつちやつてるの。活動報告で言つとけよ」

「ムキーツ!!!」

脇坂安治、ぐだ子がヒートアップしたところで梯子を外す。

「ころちゆ」

「おいおい、人を簡単に殺すなんて言つちやダメでちゆよー」

わかつた、コイツ天性の煽りストだな。発言の一つ一つがヘイトを稼ぐ一助と化している。いやらしい奴だ。

だが落ち着け、落ち着け私。今の私はリヨぐだ子。戦闘力ならソロモンすら締め上げることが出来る実力の持ち主だ。高々サーヴァント程度へし折れる。

そう思つた矢先に、脇坂は私に向かってこう言つた。

「いいのか、暴力を振るつて、いざとなれば、マブダチのサブちゃん呼んでお前を72時



間犯し続けることになるぞ。その間、俺は隣でお前を煽り続ける」

「ふん、私に欲情する奴がいるとでも?」

何せこのビジュアル。このギョロ目、二頭身、高い肉体スペック。勝てる奴などそうはいない。

「三郎は言っていた、オナホ妖精精ってロマンだよなつて」

「すいません、勘弁してください」

アカン、この小説R—18に行つちやう。それだけはアカン。管理人さんに注意されちやうことになる。

「ツツコミポジは駄目だな、戦闘力が100分の1にまで劣化してしまう」

そう言ったぐだ子の表情はどこか晴れ晴れとしていた。

「戦わずして勝つ、これが戦の常道よ」

「——脇坂お前……」

「これが、私のヒーローとしての道だ」

そう言った脇坂の笑顔はどこか安らいでいて、何の憂いもなかった。

「大丈夫だよぐだ子。オレも、これから頑張っていくからさ」

「——」

そして彼はその儂い笑顔を見せたまま、光り輝くレイシフト装置に導かれ——

「いや、行かせねえよ！ どこに行こうとしてるんだおめえは!!」

「チツ、バレたか」

「会って数分だけどな、お前の心は大体わかってるんだよ。名言レイプしやがってよ」

なんかうまい具合に終わらせようとしていた脇坂を捕縛し、そのまま押さえつける。

「私思うんですけどね、そろそろエミヤさん休ませましようよ。いつもどこかの世界に行つて戦つてるじゃないですか」

「しよがないだろエミヤ人気なんだから」

恋姫の世界からハイスクールD×D、或いは同じFateの世界。ハーメルンでエミヤさんを見ない日はない。

「あと八幡くん、比企谷八幡くんも。このままじゃ彼ら過労死するぞ。代わりに私が主人公するからさー!」

「ただ単に出番欲しいだけだろ!!」

艦これ世界とか、私溶け込める気がするんですよ。淡路水軍知りません? あれ率いてたの私ですよ。

そういつて脇坂はこれでもかと自分をプッシュする。その積極性だけは評価に値するが、いかんせん性格が鬼畜畜生小物外道なので主人公には向かない。かませキャラするにしても落第騎士の桐原静矢君のようなカルト的な人気を博しそうである。

「失敬な、私はただ次回作の大河主人公になりたいだけだ！」

「地味に野望デカいなお前!!」

井伊直虎より私の人生の方が面白いですって絶対！ 黒田官兵衛がなれて自分がなれないなんてことはあり得ない。などと云った主張を続ける脇坂安治。ナチュラルに人を見下すその精神性だけは感嘆に値する。

「落ち着くんだぐだ子殿、そしてしっかりと記憶し、受け止めるのだ。馬鹿は死んでも治らない」

「………悲しいこと言うなよ、源三位頼政」

脇坂安治はどう足掻いてもこういう人間なのだ。戦国時代という闇が彼という巨悪を作り出してしまった。悲しい、寒い時代だった。

「時代が悪いんだ！ 私は悪くない！」

「やっぱお前が悪いわ」

キャラが濃い、ひたすら脇坂のキャラが濃すぎる。

「あわよくば、この短編の準レギュラーに成りたい」

「オリキャラは準レギュラーになれるわけねえだろ！ 自重しろっ！」

脇坂とぐだ子は互いに取っ組み合いを続け一歩も引こうとはしない。

仲が悪いようでコンビとしてみればそれほど悪くない、トムとジェリーのような関係

であつた。

故にその様子を残りの源氏レンジヤイたちは生暖かい目で見つめていた。

「なんだお前は、もしかして自分がこの戦隊のリーダーだつたりするのか？ リーダーだから好き勝手に振る舞つていいと？」

「リーダー？ 馬鹿いつてんじゃねえ。私がリーダーな訳ないだろ。お前は自分がマスターだからといつて一番偉いと勘違いしてんじゃねえか？」

堪忍袋の緒が切れる。そんな風な音がした。

「面出ろや、おらあ!!!」

「喧嘩売つてきたのはぐだ子、お前だ。吐いた唾飲みこむなよオ!!」

二人は決裂、今にも殺し合いが始まらんとする。

「新羅三郎義光呼んでこい！ エロシーンの始まりだ」

「やつてみるや！ フタレターのごとくギャグにしてやんよ!!」

ぐだ子、今すぐち〇こを生やしてふたなりになるんだ！

「了解、みさくらなんこつ!!」

どこかでどこぞの先生の声が聞こえた。その言葉に導かれるようにぐだ子が服を脱ごうとした、その時のことである。

「勅命である——双方、矛を収めよ」

瞬間、肉体にとつてもない負荷がかかる。息すら止まるごときその重圧に、流石のぐだ子も立つのがやつとであった。

「お前は、いや、貴方は一体……」

辺りを見れば、彼女の周囲、脇坂安治ですら一人の男にひれ伏し、皆一様に頭を垂れる。

「安治が無茶をした。赦してくれ、奴はこれといって特徴のない地味な奴でな、悪いやつではないのだ」

「脇坂が地味な奴なら、世の中の人全員無個性になるわ……」

ぐだ子が金縛りのように動きを止め、緊張を孕んだ声に変わる。

尊大にして荘厳。高貴にして清貧。そんな言葉では足りない男がそこにいた。気づくべきだった、福井の訛りで農耕を行っていたあの人物の存在を。あれこそ、あの人が、今の日本そのものであることを。

「そういえば……、まだ名を、いつていなかっただな——余は男大迹王。継体天皇をといた方が分かりやすかろう。源氏レンジヤイの首魁よ」

現代天皇家の皇祖様がなんぼしよつとね!?

「馬鹿野郎！ お前ら本当に馬鹿野郎!! どうして天皇なんて持つてきたんだ!!」

「陛下を無礼るな、日本出身鯖の中でも上位に来る弓の名手だぞ」

「余のクラスはアーチャーだ」

「頼政とかぶってるんですけどお!!」

「仕方ないのお、ルーラーでもいい」

すごいぞ天皇、ヤバいぞ天皇。継体天皇は童の上位種である龍を追い払った実力を持つガチ英雄だ。同クラスで明確に上位者と言えるのは桃太郎の元ネタの吉備津彦とか神武帝ぐらいじゃないか?

「こんなギャグ短編に出てくるお方じゃないよ、もつとシリアスな聖杯戦争に出れる人だよ。ていうかもう、源氏レンジャイじゃない。大和戦隊とかでいいんじゃないかな?」

「[[!!?]]」

「ぐだ子お前、頭いいな」

「やはり天才か……」

その発想はなかった。まさか源氏にこだわらなくていいという逆転の発想、男大迹王以下の面々は驚嘆する。

「クラスは如何にすべきか、陛下がルーラーであれば、ライダーが被ろう」

頼政が音頭を取ると、次々に意見を述べる

「アドミラルというクラスにしよう、艦これ二次創作作家に目を付けられたいし」

新しいエクストラクラスであるアドミラルを脇坂が錬成すると、次々にほかの鯖も自分に分合ったクラスを述べる。

「わしはスイマーにしよう、こう見えても泳ぎだけは得意じゃった」

平宗盛は唯一の特技である泳ぎを元にスイマーに。

「では某はポエマーにしよう、こう見えてそれなりに詩は嗜んでいた」

頼政は詩歌を好んでた故にポエマーに。

「俺、怨霊になれるからスピリットにするか」

義平は持ち前の雷伝説からスピリットに。

「「「完璧だ!!」」」

「ああそうだな、完璧だな。誰一人として基本クラスでないのを除けばな!!」

コアすぎるわ、こんな戦隊。

「大和戦隊源氏レンジャイ、完璧だな」

「違う違う、大和戦隊は兎も角、源氏レンジャイいつまで引きずってるんだよ」

「では大和レンジャイか」

「全員エクストラクラスだからエクストラレンジャイはどうだ？」

「いや、ここは我らが友であるぐだ子の名前をとってぐだ子レンジャイにしよう」

「わたしや、敵だよ。なんで敵の名前取ってくるんだよ」

馬鹿かね脇坂。

しようがねえだろ、人殺ししかやってこなかったんだから。

そんな殺伐とした会話を、ぐだ子と脇坂は微笑みながらやっていた。

「さて、そろそろお開きにしようか」

「え、ちよ……どこ行くの」

突如として帰り支度を始めた源氏レンジャイもとい大和戦隊の男たち。

戦わないんですか？ そんなリヨぐだ子の疑問をガン無視して赤ら顔で奴らは一人ひ

とりレイシフト装置から遠ざかっていく。

「所詮某たちは代役、偏に高祖母様に頼まれただけである」

「そうそう、俺も弟妹たつての願いだつたからな。本命が来るまでのつなぎでしかねえ」

「敗者に意見を言う権利はない。なに、わしはただお呼ばれしただけの無力な男じゃ、

戦っても肉壁にしかねれん」

そう言つて、急にドライな反応を示す、比較的まともな三人の対応にぐだ子は急に心

が覚める思いがした。

なんだろうこの気持ち、凄く寂しい。

「次、救世戦隊メシアンズが来るとだけ報告しておこう」

「はっ」



救世とメシアという言葉に真顔になるぐだ子。完全に例のあいっらじやないですかヤダー。

戦う？ メシアだ、誰も勝てんぞ……。塵一つ残さず死ぬ。

圧倒的恐怖と、約束された絶対なる敗北を宣言される中、ぐだ子の肩を一人の男が優しく叩いた。

「私は、お前のことが大好きだったぞ」

「脇坂……」

「大谷吉継ぐらい好ましい人間だ、一週間ぐらいは忘れない」  
「救世主たちが来たら、お前を盾にするわ」

脇坂は令呪で出荷する。そんな思いを決めた、リヨぐだ子であった。

後ろでらん豚になってそんなーと言っている脇坂を尻目に、来週はどうやって生き残ろうと、遠い目をぐだ子はしていたのであった。

# 源氏たちのF/GO ステータス

【CLASS】ライダー

【マスター】

【真名】源新羅三郎義光

【性別】男性

【身長・体重】170cm・66kg

【属性】混沌・善

【ステータス】筋力B 耐久C 敏捷A 魔力D 幸運A 宝具A+

【クラス別スキル】

対魔力：C

第二節以下の詠唱による魔術を無効化する。

大魔術、儀礼呪法など大掛かりな魔術は防げない。

騎乗：B

騎乗の才能。大抵の乗り物なら人並み以上に乗りこなせるが、魔獣・聖獣ランクの獣は乗りこなせない。

【固有スキル】

武芸十八範：A+

合戦を行うにあたって武士が身につけておくべき武芸の技能。

剣術、柔術、弓術、槍術、馬術等の古武術のほか、

見切り、心眼（真）、宗和の心得、勇猛、軍略など專業スキルに対し補正が付く。

義光は合気柔術の開祖や小笠原流、武田流などの流鏑馬の古の武家の心と形をいまに伝えている。

計略：A

物事を思い通りに運ぶための才能。状況操作能力。

戦闘のイニシアティブ判定において常に有利な修正を得る。

反骨の相：B

権威に囚われない、裏切りと策謀の梟雄としての性質。

同ランクの「カリスマ」を無効化する。

## 【宝具】

## 『楯無』

ランク：B 種別：対人宝具 レンジ：― 最大捕捉：―

清和源氏に代々伝えられたという8種の鎧である源氏八領の一つ。

その堅牢さから盾がいらなと言われ、甲斐源氏に伝来した家宝。八領の内唯一現存する宝具であり、現代でも貴重な一品。

通常攻撃では傷一つ付かず、盾の如き堅牢さを持つ鎧であり、同ランク以下の宝具の攻撃を無効化、同ランク以上であっても、ダメージを半減する効果を持つ。

なお本人は『薄金』の方が着たかった模様。

## 『御旗』

ランク：A+ 種別：対軍宝具 レンジ：― 最大捕捉：―

甲斐源氏によって脈々と受け継がれてきた日章旗であり、現存する最古の日章旗とされる。

日本の象徴である日輪を掲げ、その威光の光の下に義光以下、彼の血族である武田氏、佐竹氏、小笠原氏、南部氏を召喚。彼が夢見た源氏の棟梁の如き威光を示す。

おき太の持つ『誠の旗』の強化版。

【Weapon】

『無銘・弓』

義光愛用の弓。八幡太郎義家を別格とすればその弓馬の腕は源氏有数であったとされる。

【解説】

源氏が生んだ最強のぐう畜有能の始まり。身内争いのほとんどはこいつが悪い。

その気になれば実の兄だろうが甥だろうが葬ってちやつかりいい位置を独占するぐらいたちが悪い。

牛若丸の祖父の大叔父という身分である。大叔母に源頼光がいる。義経と頼光の漢字を合わせると義光になるのはなぜだろうか。何かを暗示しているのだろうか？

聖杯にかける願いがあるとしたら源氏の棟梁になりたいとのこと。

Q 源氏に聞きました嫌いな身内は？

義忠「三郎叔父さん」

義綱「三郎」

為義「大叔父の新羅三郎とかいう畜生」

【CLASS】バーサーカー

【マスター】

【真名】源対馬守義親

【性別】男性

【身長・体重】174cm・81kg

【属性】混沌・狂

【ステータス】筋力A 耐久A 敏捷B 魔力C 幸運C 宝具

【クラス別スキル】

狂化：B

全パラメーターを1ランクアップさせるが、理性の大半を奪われる。

【固有スキル】

直感：B

戦闘時、つねに自身にとって最適な展開を“感じ取る”能力。  
 視覚・聴覚に干渉する妨害を半減させる。

戦闘続行：C

瀕死の傷でも戦闘を可能とし、死の間際まで戦うことを止めない。

仕切り直し：C

戦闘から離脱する能力。

また、不利になった戦闘を戦闘開始ターン（1ターン目）に戻し、技の条件を初期値に戻す。

【宝具】

『悪対馬守』

ランク：B 種別：対人宝具 レンジ：― 最大捕捉：―

剛勇で知られ、後に朝廷に討伐されたバーサーカーの持つ逸話が昇華されたもの。

マスターの令呪を消費することで、このサーヴァントは令呪一面につき、同等の存在を召喚することが可能。

最大で二人までの同時運用が可能であり、例えば倒されたとしても最大で四回の再臨を

可能とする。

【解説】

新羅三郎の甥であり、牛若の曾祖父にあたる人物。  
根っからの暴れん坊でまさしくバースーサーたるに相応しい逸話を持つ。

【CLASS】ライダー

【マスター】ぐだ子

【真名】源範頼

【性別】男性

【身長・体重】165cm・56kg

【属性】秩序・中庸

【ステータス】筋力C 耐久C 敏捷C 魔力C 幸運B 宝具A+

【クラス別スキル】

騎乗：C



騎乗の才能。大抵の乗り物、動物なら人並み以上に乗りこなせるが、野獣ランクの獣は乗りこなせない。

対魔力：C

第二節以下の詠唱による魔術を無効化する。

大魔術、儀礼呪法など大掛かりな魔術は防げない。

【固有スキル】

情報抹消（偽）：B

対戦が終了した瞬間、一つでもアサシンのステータスより上回っている相手がいる場合、

或いは相手がそう認知している場合、

目撃者と対戦相手の記憶から彼の能力・真名・外見特徴などの情報が消失する。アサシンの時よりも偽装が働かない為、ランクが下がっている。

勇猛：B

威圧・混乱・幻惑といった精神干渉を無効化する能力。

また、格闘ダメージを向上させる効果もある。

軍略：C

一対一の戦闘ではなく、多人数を動員した戦場における戦術的直感力。

自らの対軍宝具の行使や、逆に相手の対軍宝具に対処する場合に有利な補正が与えられる。

【宝具】

『参州代將軍』

ランク：A+ 種別：対軍宝具 レンジ：1〜99 最大捕捉：10000人

平氏追討、その総大将として兄より直々に命じられ、見事平氏を打ち滅ぼした範頼最大の偉業。

幕府から派遣された将たちを統括し、命ずるがままに相手を打ち滅ぼすまで止まらない武家の棟梁のその代行としての権限。生涯不敗たる軍の統括は彼が最も得意としたものである。

『虎月毛』

ランク：C 種別：対人宝具 レンジ：― 最大捕捉：―

平家討伐の際、九州に降り立った範頼が名門である菊池氏に与えた名馬、

あるいは自身の旧臣である九門修理飼育していたとされる長命馬。  
五百年は生きてとされる。

【解説】

ライダー版範頼君。温厚な性格であるが、いざ戦が始まると自分も戦いたくなるぐらいには好戦的。

名馬らしい名馬を所持していたためにライダーにもなれる。

【CLASS】セイバー

【マスター】

【真名】源義平

【性別】男性

【身長・体重】180cm・77kg

【属性】混沌・善

【ステータス】筋力A 耐久B 敏捷B (A++) 魔力D 幸運D 宝具A

【クラス別スキル】

対魔力：A+(B)

A+以下の魔術は全てキャンセル。

事実上、魔術ではセイバーに傷をつけられない。

騎乗：B

騎乗の才能。大抵の乗り物なら人並み以上に乗りこなせるが、魔獣・聖獣ランクの獣は乗りこなせない。

【固有スキル】

勇猛：A

威圧・混乱・幻惑といった精神干渉を無効化する能力。

また、格闘ダメージを向上させる効果もある。

直感：B

戦闘時、つねに自身にとって最適な展開を“感じ取る”能力。

視覚・聴覚に干渉する妨害を半減させる。

魔力放出(雷)：A+

武器ないし自身の肉体に魔力を帯びさせ、瞬間的に放出する事によって能力を向上させる。

セイバーの死後に残した伝説によってその身に雷を纏わし、真名解放と同時にその身を雷に変化させる。

【宝具】

『八竜』

ランク：B 種別：対人宝具 レンジ：― 最大捕捉：―

源氏八領の内の一つ。全身に八大龍王の飾りがつけられた甲冑であり、  
 霊験あらたかな守護を持つ鎧、単純なダメージの抵抗のほか、その本領は対魔力の高  
 さにあり、

セイバーはこの鎧を身に纏い妖魔や狒々などの怪物を打ち払った。

『悪源太蹴雷(あくげんたしゅうらい)』

ランク：A 種別：対人宝具 レンジ：― 最大捕捉：1人

死の間際において「雷になって蹴り殺してやる」と宣言し、後に雷となって自らの仇を討った逸話が昇華されたもの。

自らの肉体を雷に変質させることで使用し、自身の敏捷値をA＋十。

雷速と同等にし、対象である人物に攻撃を与えるまで相手を狙い続ける。

### 『祖師野丸』

ランク：D 種別：対人宝具 レンジ：2～4 最大捕捉：1人

セイバーが狒々退治に使用し、後に八幡宮に奉納されて神剣となった一振りの大太刀。

現在でも現存する剣であり、神威を備え、妖魔、悪鬼に対し治療不可の攻撃を放つことが可能。

### 【Weapon】

#### 『石切丸』

セイバーが戦場において愛用した大太刀。

### 【解説】

播磨守義朝の嫡男で本来の源氏棟梁となれる逸材であつた勇猛果敢な若武者。

セイバーとしては利器型の剣と発動型の雷変化を使える良鯖。武士らしい人物であるが脳筋なのが玉に瑕。

召喚されたとき範頼からは歓迎されたが、牛若からは違う、そうじゃないと言われた悲しい過去を持つ男。

【CLASS】アーチャー

【マスター】

【真名】源三位入道頼政

【性別】男性

【身長・体重】166cm・66kg

【属性】秩序・善

【ステータス】筋力C 耐久C 敏捷B 魔力D 幸運C 宝具B

【クラス別スキル】

対魔力：C

第二節以下の詠唱による魔術を無効化する。

大魔術、儀礼呪法など大掛かりな魔術は防げない。

単独行動：C

マスターからの魔力供給を断つてもしばらくは自立できる能力。

ランクCならば、マスターを失ってから一日間現界可能。

【固有スキル】

千里眼：C

視力の良さ。遠方の標的の捕捉、動体視力の向上。

さらに高いランクでは、透視、未来視さえ可能とする。

心眼（真）：C

修行・鍛錬によって培った洞察力。

窮地において自身の状況と敵の能力を冷静に把握し、その場で残された活路を導き出

す「戦闘論理」

逆転の可能性が数%でもあるのなら、その作戦を実行に移せるチャンスを手繰り寄せられる。



追撃：C

離脱行動を行う相手の動きを阻害する。同ランクの『仕切り直し』を無効化し、相手が離脱しきる前に、一度だけ攻撃判定を得られる。

### 【宝具】

#### 『雷上動』

ランク：B 種別：対人・対軍宝具 レンジ：1～50 最大捕捉：100人

元は文殊菩薩の化身、楚国の養由基の娘椒花女より源頼光が夢中に授けられた弓。

文殊菩薩の両眼よりつくられた『兵破』『水破』の二本の鎗矢が備わっており、

兵破は射ち抜いた者の霊的、魔的加護を失わせ、霊核そのものを損傷させる必滅の矢であり

水破は天空に向かって射ることによって結界を形成させ認識阻害や気配遮断、魔術の効果すら打ち消し、

アーチャーに居場所を察知させる。

また『雷上動』の弦を鳴らした音色を用いて魔を払い病を退け、

あらゆるバットステータス、精神干渉を無効化する。

## 【解説】

高祖夫が女性だった件

別名馬場頼政。武術と芸術を愛する平安軍事貴族であり、基本的に心優しい青年。

朝家の臣として生まれ、そして以仁王の挙兵で自害した。基本的に心優しい脳筋だが、時流を見る目はある。

その弓の腕は鎮西八郎に並ぶ腕である。

兵破は相手がサーヴァントであれば必殺であり、水破は地形での優位を撤廃させ、陣地作成スキルを破壊し、アサシンの気配遮断を見抜くなど最弱いじめを敢行できる。

【CLASS】 ライダー

【マスター】

【真名】 脇坂甚内安治

【性別】 男性

【身長・体重】 164cm・59kg

【属性】 混沌・善

【ステータス】 筋力C 耐久C 敏捷B 魔力D 幸運A+ 宝具B

## 【クラス別スキル】

対魔力：A++

A++以下の魔術は全てキャンセル。

事実上、魔術ではライダーに傷をつけれない。

また本来魔術ではない呪術などの自然を元とした術すら無効化する。

騎乗：B

騎乗の才能。大抵の乗り物なら人並み以上に乗りこなせるが、

魔獣・聖獣ランクの獣は乗りこなせない。

## 【固有スキル】

貂の皮：—

ライダーが所持したとされる貂の皮で作られた槍鞘。

ライダーの勇武を表す象徴のほかに、自らの武功を脚色し脇坂家の威光を知らしめるためのものとされる。

自らのステータスを隠さず、あえて誤認させ戦力を見誤らせるほか、

Cランク程度の戦闘に関するスキルを自身に付与することも可能。

持ち前の演技力や詐術によって敵をだます、姦計と狡知の象徴である。

嵐の航海者：B

船と認識されるものを駆る才能。

集団のリーダーとしての能力も必要となるため、軍略、カリスマの効果も兼ね備えた特殊スキル。

鑑識眼：A

人間観察を更に狭くした技術。対象となる人間が

将来的にどのような形で有用性を獲得するかを目利きに極めて優れている。

ライダーの場合、時代の最終勝利者を見極め、それに追従することによって戦国の世では珍しい大往生を遂げた。

【宝具】

『協坂艦隊』

ランク：B 種別：対軍宝具 レンジ：― 最大捕捉：―

ライダーの所領である淡路や伊予において活動していた水軍衆であり、所領を得た協坂が熊野水軍の棟梁である九鬼嘉隆に学び、一角の軍として朝鮮や小田原征伐の海上封

鎖、海戦で活躍した秘蔵の軍。

1000人ほどの小規模の海軍であるが、脇坂の巧みな運用によつて非常に精強かつ勇猛な軍となっている。

【Weapon】

『無銘・十文字槍』

ライダーが賤ヶ岳の戦いにおいて使用し、柴田勝政を討ち取つたとされる槍。

其の武功を以てして賤ヶ岳七本槍の一角として名声を高めた。

【解説】

戦国時代の最終勝利者。

一度は仕えた浅井家が滅んだものの、その反省を生かして徐々に石高をあげ、外様大名だったが戦国時代が終わつた後に願ひ譜代となつて譜代大名と化し、明治政府では子爵家になつた名門中の名門。

基本的にリアリストであり、性根は小物。しかし、卓越した先読みの目で戦国を生き抜き、裏切り者の汚名を自分より目立つた小早川秀秋に擦り付けることでヘイトを減らした隠れた傑物。

大阪の陣では自身が隠居し、倅に武功を積ませることであまり具合に世代交代を成し遂げたり、賤ヶ岳七本槍の中で最も長く生き、最も幸福な死を遂げ、関が原の裏切りでは大谷吉継の呪いを無効化し、穏当な生涯を送るなど幸運な生涯を遂げた。

生涯に愛した妻は一人でありながら、その妻との間に子供をポンポン作るなど愛妻家でもある。

【CLASS】ライダー

【マスター】

【真名】平宗盛

【性別】男性

【身長・体重】166cm・98kg

【属性】中立・中庸

【ステータス】筋力E 耐久E 敏捷E 魔力E 幸運E 宝具E

【クラス別スキル】

対魔力：D

一 工程（シングルアクション）による魔術行使を無効化する。  
魔力避けのアミュレット程度の対魔力。

騎乗：C

騎乗の才能。大抵の乗り物、動物なら人並み以上に乗りこなせるが、  
野獣ランクの獣は乗りこなせない。

【固有スキル】

仕切り直し：C

戦闘から離脱する能力。

また、不利になった戦闘を戦闘開始ターン（1ターン目）に戻し、技の条件を初期値に戻す。

無知無能：EX

史跡において優れた業績が無く、歴史に汚点を残した愚者として評された存在。

自身のステータスをすべてEランクとし、自身では戦うことすらままならず、宝具の展開もまともに出来ない。

ライダーは戦いにおいて勝利すること不可能であることが運命レベルで決められて

おり、自身のあらゆる行為が敗北へとつながる結果をもたらす可能性すらある。

『平家物語』や『源平盛衰記』に記されたあらゆる愚行と脚色によってあらゆる存在から侮蔑を受け、引き立て役とされている。

### 【宝具】

『盛者必衰の理』

ランク：EX 種別：対人理宝具 レンジ：― 最大捕捉：1人

「祇園精舎の鐘の声。諸行無常の響きあり。沙羅双樹の花の色。盛者必衰の理をあらわす。

おごれる人も久しからず。ただ春の夜の夢のごとし。たけき者もついには滅びぬ。偏に風の前の塵に同じ」

盛んな者は必ず滅びるといふ人間のどうしようもないあり方とその性質を表した言葉であり、世界の真実である。

栄華を極め、形あるものはいずれ滅ぶという無常を是とし、自らの滅びを認めることで、指定した人物を道連れとして共に滅びを強制する、逃れられぬ人理の現象。

時代は流れ、古き慣習は淘汰され、そして人は新しい体制、文化、人理を求める。そしてその中で何を受け継ぎ、何を捨てるのかは、後の人が決めることである。



この宝具から唯一逃れ得るのは太古の昔より一度たりとも滅んだことの無い現天皇家だけである。

〔Weapon〕

『小鳥丸』

平氏に代々伝わる名刀であり、本来は宝具級の一品であるが、無知無能のスキルによつて使用できない。

『唐皮』

宗盛の祖先が不動明王より譲り受けたとされる鎧。

敵の矢から身を守ることが出来るなどが出来るが、無知無能のスキルで宝具としては使用できない。

『木下』

平家物語によつて源頼政の子である仲綱より譲り受けた名馬。

無知無能のスキルによつて宗盛を殺さんばかりに憎んでいる。

〔解説〕

源平合戦における平家の棟梁。無能の癖に、頑張れば英雄王を倒せる宝具を持つ反則

鯖の一人。

性格は非常に善良であり、官僚としては非常に優秀であるが、武士としては二流の人、何度も政治的決着を模索したものの、源氏の兵士たちは皆脳筋、朝廷も新参者の平家を切り捨てたチャンسسと切り捨てた結果、脳筋たちは義経を筆頭に肅清、朝廷も権力基盤を失うこととなり、最終的に鎌倉でぬくぬくしていた頼朝の最終勝利が決まったという頼朝における最MVPである男。

基本的に無能として描かれるものの、上として立つ能力がないだけで官僚としての実務能力は優秀、実際源氏に囚われ、逗子付近に暫く軟禁されていた時、宗盛と交流した人間の心をつかむなど人間的な魅力はあった模様。

【CLASS】アーチャー

【マスター】

【真名】男大迹王（継体天皇）

【性別】男性

【身長・体重】169cm・58kg

【属性】秩序・善

【ステータス】筋力B 耐久C 敏捷C 魔力A 幸運A+ 宝具A

【クラス別スキル】

対魔力：A

A以下の魔術は全てキャンセル。

事実上、現代の魔術師ではアーチャーに傷をつけられない。

単独行動：A

マスター不在でも行動できる。

ただし宝具の使用などの膨大な魔力を必要とする場合はマスターのバックアップが必要。

【固有スキル】

皇祖：A

同ランクのカリスマと神性、皇帝特権を備える特殊スキル。

現天皇家における皇統の初代であり、その祖である皇家の始祖であるアーチャーは、日本における文明・文化・伝統の頂点その始まりともいえる。

日本という地に生まれた英霊はすべからずアーチャーにひれ伏すものとし、反逆者や

荒神、アーチャー即位以前の人物等の一部を除いて、アーチャーに危害を加えることは心情的、物理的に不可能である。

千里眼：B

視力の良さ。遠方の標的の捕捉、動体視力の向上。また、透視を可能とする。さらに高いランクでは、未来視さえ可能とする。

魔力放出（水）：A

アーチャーに備わる先天的な治水の御業。

水の流れを読み、魔力を纏わせることでその流れを利用して攻撃と防御に使い、応用として恵みや癒しなどにも転用が可能。

また千里眼と合わせて地脈にある水源を見つけ、間欠泉の様に地形を変えることも可能とする。

【宝具】

『足羽山の立矢』

ランク：A 種別：対人、対軍宝具 レンジ：1～99 最大捕捉：600人

九頭竜川の黒龍を打ち払い、岩を貫き水を湧かせた逸話が宝具に昇華されたもの。

あらゆるものの滞った部位を貫くことで毒素や弱点を先天的に貫く、致命の一撃。故に逸話から弱点が知れるものは無意識にその部位を狙われることとなる。

また地中を打ち抜くことで、岩を貫き、水を湧かせることで対軍クラスの水の奔流によつて敵を洗い流す。

【解説】

福井県出身の最強のサーヴァントと言えはおよそこの男。現天皇家の直系の最初である皇祖の一人。

同じく皇祖のスキルを持つのは初代神武と10代崇神ぐらいであり、歴代の中でも上位の格を持つ天皇と思われる。農業や内政、治水に造詣の深い一面のほか、弓の名手であり、九頭竜川の龍を鎮めるなどの伝説を持つ武人の一面を持つ。